

大阪歴史博物館所蔵

「浪花百景」

——『摂津名所図会』『浪華の賑ひ』とともに

1 浪花百景錦城の馬場【きんじょうのばば】

国員画

『浪花の賑ひ』 初編

金城 きんじやう

〔京橋の南方にあり大手御門は西向にして東

堀に至りては思案橋すじ也。故に此通を大手すじと

号す、南は玉造口東を青屋口北を京橋口といふ〕。

摂陽群談云金城は東生郡大坂玉造岸にあり

云々、金は七宝の初土中に朽ず火も焼こと能わず、

因て以て世俗金城と祝し奉ると云々、城郭の結構

守護の厳重は申も恐れ多し城外の風景こと更に美観

なり、二月初午の日は貴賤老若群集ひて遊宴す、

尚空うらゝかに雲雀さへづる頃は此に來りて觀樂す

ること日々にして賑わしき事ひとへに太平の御恩沢

仰ぐべし尊ふべし。

2 浪花百景 今橋つきぢの風景【いまばしつきぢのふうけい】 国員画

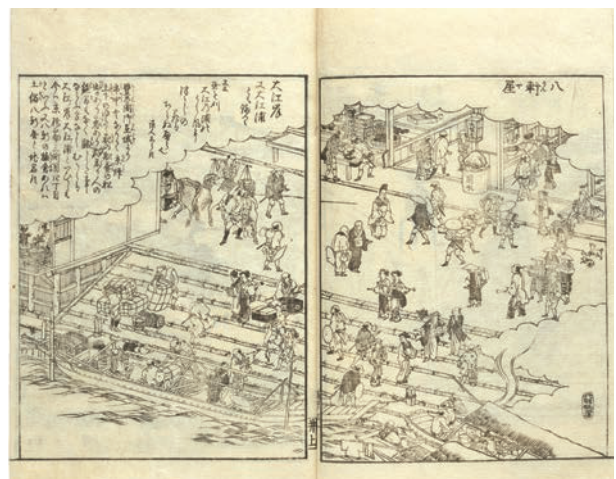
3 浪花百景

八軒屋夕景【はちけんやゆうけい】

国員画



『浪華の賑ひ』 初編 八軒家



『新津名所図会』 卷之4上 八軒屋

『摂津名所図会』巻之四上

八軒屋^{けんや}

大江岸又大江浦とも詠り（中略）

豊太閤御在城より市中となりて京師上下のゆき、夜の船、昼の船出

るあり、着あり。群来る人の絶間もなく賑しき事ならぶ方なし。むか

しは大江の岸、大江の浦といひしも、今は京橋筋三丁目、四丁目とい

ふ。又八軒の旅舎あれば、土俗八軒屋と地名す。

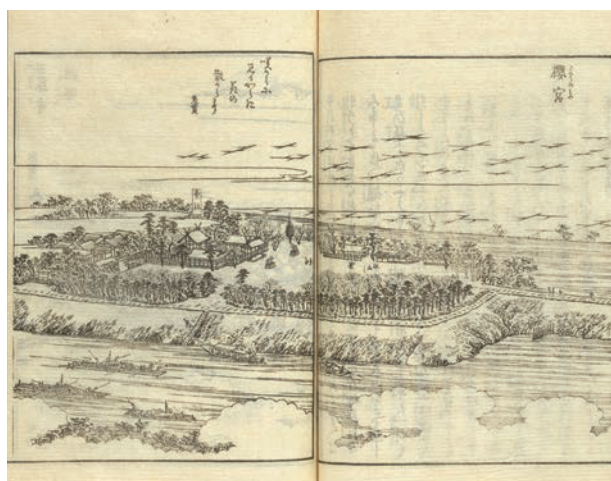
4 浪花百景

さくらの宮景【さくらのみやけい】

国員画



『浪華の賑ひ』 初編 桜宮



『摂津名所図会』 卷之3 桜宮

『撰津名所図会』 卷之三

桜野宮 さくらのみや 「中野村にあり。例祭九月廿一

日。旧地は野田小橋、故大和川の堤、字を

桜野といふ所にあり。故に名とす」。

祭神天照太神 「此杜頭に神木とて桜多

し。弥生の盛には、浪花の騷人こゝに来つ

て幽艶を賞す。淀川の渚なれば、きよらな

る花の色、水の面にうつるけしき、塵埃を

避て神慮をすずしめ奉る也」。(後略)

『浪花の賑ひ』 初編

桜宮 さくらのみや 「綱島の北にあり」 所祭天照皇太神にして例祭九月廿一日なり、当社は旧

野田の小橋故大和川の堤。字を桜野といへる所に有しを、後世此に移す故に旧地の名を

以つて桜野宮と号せしが、いつしが社頭の傍に数百株桜を植しより今は桜の宮と称して

花ゆへ号けし如くなるも所謂名詮自性なるべし。又是より十丁ばかり川上に母恩寺と

いふ女僧寺あり。尼僧常に綿帽子を製す頗る光美しくして名物也。当寺の北東なる田圃

の中に鶴墳といへるあり。頼政の射留し化鳥を埋む所と云。

桜宮 さくらのみや 桜の宮は淀川の東の岸にありて社頭はいふもさらなり、水辺より馬場の堤にいた

るまで一円の桜にして弥生の盛には雲と見雪と疑ふ光景、西の岸は川崎堤より北につゝ

きて堀川の樋の口まで此も桜の並木となれば、川をはさみて兩岸の花爛熳として水に映

じ川風花香を送りて四方に馥郁たり。さる程に都下の貴賤老若陸を歩み船にて通ひて

諷はり舞はりて終日遊宴す。實に浪花に於て花見の勝地といふべし。

5 浪花百景

堂じま米市【どうじまこめいち】

国員画



『浪華の賑ひ』 3 編 堂島浜



『摂津名所図会』 卷之4 上 堂島穀糶糶

『摂津名所図会』 卷之四上

堂島だうじまの市立いちたちは雑穀くさくのたなつものあきなふを糴糶あきなふなり。其市人そのいちひと

を見るに、早旦さうたんより斜陽しややうまで街ちまたに聚あつまりて、

指頭しとうを揺うごして百万ひやくまんの斛数こくすうを相対あいたいす。其糴かまひす

しき事こといはん方かたなし。其年としの豊凶ほうけう、又は

時候じこうの幸災かうさい、天地てんちの順不順じゆんふじゆんによりて、尊たうとき

あり、卑いやしきあり。其高下かうげの極きよくを市諷さうばといふ。

これを又須臾しゆゆに遠とをき国々くにまでもしらすとか

や。いかなる術てなてにやしらず。(後略)

『浪花の賑ひ』 三編

堂島浜たうじまのはま 「浪花の北方ちやうきやうに有」貞享年間ちやうきやうねん此地このちひら開ひらけ元禄中げんろくちゆう大江橋をほえ・渡辺橋わたなべばし・田蓑橋たみばし・玉江橋たまえばし

等を初はじめて架わたせり。米穀べいこくの市場いちばは大江橋北詰をほえより渡辺橋わたなべばしの間にあり、是を相庭さうばの濱はまといふ。

此東西このとうざいの両側りやうかわは残のこらず相場屋さうばやにして屋上やのうへに物見ものみの台だいを作り、市人いちびと此に登のぼりて雲氣くものきを考かんがふ、

晴雨寒暖せいいうかんぬんにより日毎ひごとに米価べいかの高下かうげありて売買うりかいの賑にぎはしき事言語ことごんごに絶ぜつす、実に他邦たほうに比類ひるいなき

市いちといふべし。

堂島浜

此地このちは浪花らうかはの北きたにありて諸国しよこくの米穀べいこくをあきなふ市場いちばなり。年としの豊凶ほうけう時候じかうの幸災かうさい天地てんちの順不

順じゆんによりて其価そのあたひの尊たうときあり卑いやしきあり、其極そのきよくを市諷さうばといふ。さる程ほどに当浜とうはまの左右さいうともに潔いさぎよき

家宅軒いえたくのきをならべ売買うりかいの客きやくを請待しやうだいす。これを相庭店さうばみせといふ。客此きやくこゝに有あつて使人つかひとを以もつて売買うりかいを

自由じゆうにす。朝あさを寄付よりつきといひ昼ひるの休みやすみを消きへといふ。夕ゆふの終をまりを大引をほひきと号がうす。されば早旦さうたんより

夕日西ゆふひにしにうすづく頃ころまで市人浜いちびとはまに群集むれつどひ、指頭ゆびさきを揺うごかして数百万すひやくまんの斛数こくすうを相対あいたいす。其その

さまじき事鼎ことかなへの沸わくが如ごとし。其繁昌そのはんじやうなること浪花らうかはの一奇観いつきくわんといふべし。

6 浪花百景

蛸の松夜の景

国員画

【たこのまつよるのけい】



『浪華の賑ひ』 3 編 蛸松

『浪花の賑ひ』 三編

蛸松

久留米御蔵屋敷の浜にあり、頗る大樹の老松にして四面に枝葉をおろして、恰も蛸の形に似たりとて世俗斯は号る也。されば蒼々として君子の操をあらわし、川水にうつる景色いふべくもあらず、月の夕雪の朝には一しほの瞻望なれば、雅俗きそひて是を賞す。此川岸の西の方に玉江橋といへる橋あり、此橋上より天王寺の大塔はるかに見ゆる也。俗に浪花の

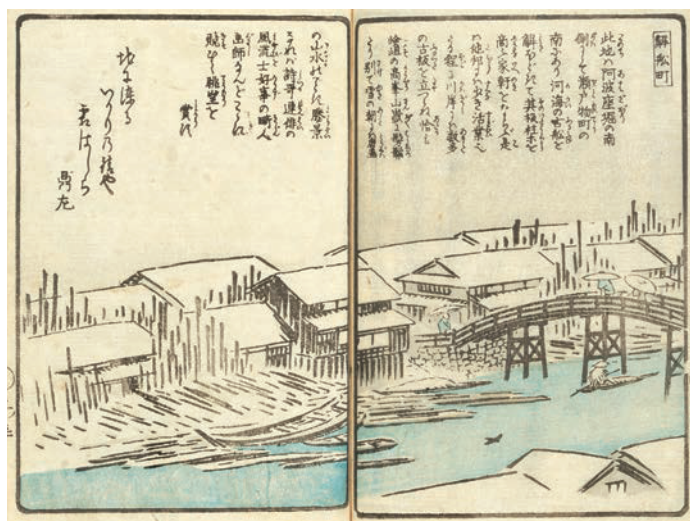
奇観とせう。

7 浪花百景 解舟町〔ときふねちょう〕 国貞画

『浪花の賑ひ』 三編

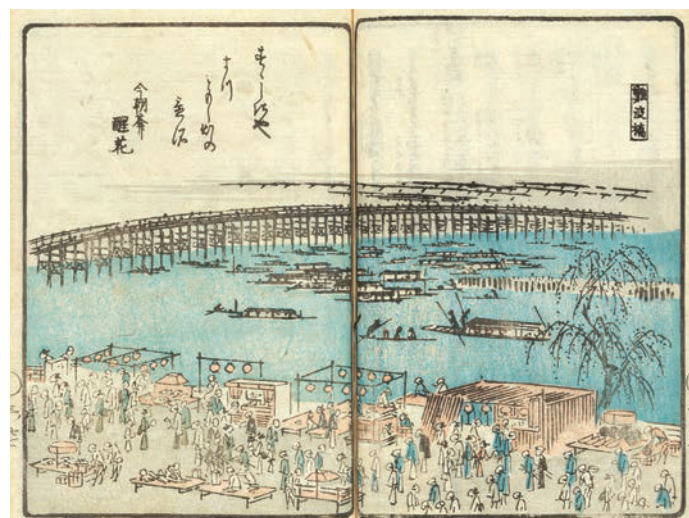
解船町

此地は阿波座堀の南側にして瀬戸物町の南にあり、河海 of 古船を解ほどきて其板柱等を商ふ家軒をならぶ。是は他邦には少き活業也。さる程に川岸には数多の古板を立てね恰も嶮岨の高峯山嶽に髣髴たり。別て雪の朝には唐画の山水のごとき勝景なれば、詩哥・連俳の風流士、好事の畸人・画師なんどこゝに競ひて眺望を賞す。



『浪華の賑ひ』 3 編 解船町

8 浪花百景 浪花橋夕涼 〔なにわばしゆうすずみ〕 国員画



『浪華の賑ひ』 3 編 難波橋

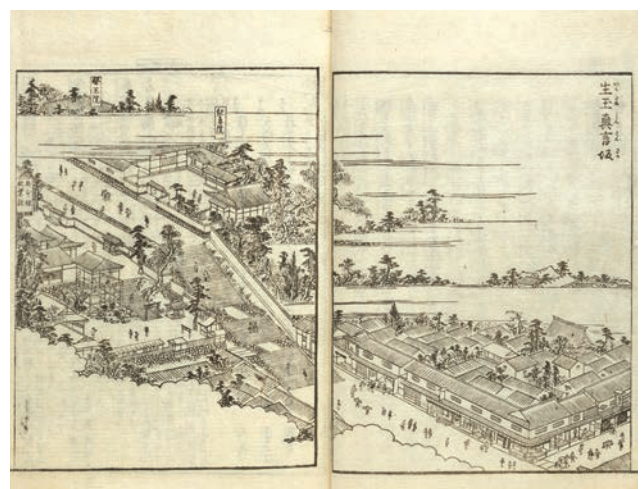
9 浪花百景

真言坂「しんごんざか」

国員画



『浪華の賑ひ』 初編 真言坂



『摂津名所図会』 卷之3 生玉真言坂

『浪花の賑ひ』 初編

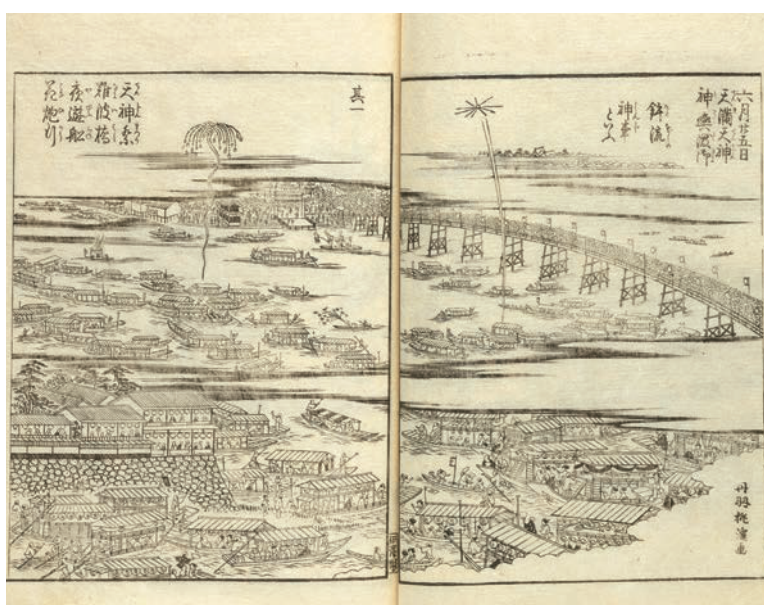
真言坂

生玉いくだまの社僧しゃそうは貫首くわんしゅ南坊みなみのぼうをはじめ余九院ほかくいんあり、故ゆへに是これを十坊じうぼうといふ。此坂このさかを上あがれば左右さいうおのゝ寺院じいんにして悉ことごとくく真言宗しんこんしうなる
ゆへ斯かくは号なづけそめしなるべし。いづれも大師だいしの御影堂みえひだうありて浪花大師ななつくはだいしめぐりの札所ふだしよなり。就中坂なかんづくさかを上あがる左ひだりの第一だいいちを桜本坊さくらもとぼうと
いひて、此寺内このじないに秋葉権現あきばこんげんの祠やしろ・観音堂くわんをんだう等ありて詣人けいじん殊ことに多おほし。

10 浪花百景

天神祭り夕景【てんじんまつりゆうけい】

国員画



『摂津名所図会』 卷之 4 上 六月廿五日天満天神神輿渡御

『撰津名所図会』 卷之四上

六月廿五日 天満天神神輿渡御 銚流神事といふ

天満宮 (前略) 四時詣人多く社内の市店・観物・軽口噺・植木屋の

鉢植・泉水の金魚・小山屋の料理月毎の廿五日の群参昼夜道に満り。

銚流しの神事は六月廿五日也。朝より御迎船として福嶋の産子はみや

びやかに船を飾て一様の浴衣を着し、櫓拍子揃へて難波橋に到り、種々

の船印に吹ぬきを翻し、飾人形一様のゆかた帷子に、太鼓を拍て踊

り狂ふ。神輿は難波橋より船に移し奉り、警固の役船前後に列し、

音楽を奏して戎嶋の御旅所へ渡御あり。祭礼の船、行列魏々玲瓏とし

て浪花の美観なり。数百の楼船、川の面に所せく迄双び、陸には棧敷

を打て幕引はへ、金屏立わたして稲麻の如し。諸侯第には家々の紋の

挑灯をてらし船遊びは三弦をならし歌の声うるはしく花炮は星降り、

昇り龍、水の面にか、やき市中の車楽、北新地の妓婦の遶物、

頓狂言限もなくありて、大坂第一の賑也。京師の祇園会、浪花の

天満祭は聞よりも見るが百倍なるべし。(後略)

『浪華の賑ひ』 初編

天満天神社 (前略)

例祭六月廿五日は銚流しの神事と号して神輿戎島之行宮に渡

御あり、其莊觀の美景なる事は世に普く見聞する所にして浪花

第一の賑ひなり。

11 浪花百景

松のはな〔まつのはな〕

国員画



『浪華の賑ひ』 3 編 松ヶ鼻 大わたし



『摂津名所図会』 卷之3 蛭子松

『摂津名所図会』 卷之三

蛭子松^{えびすのまつ}

〔木津川町北端にあり。此辺の名松^{めいしやう}にして、蒼々たる枝葉川^{さうく}

の面^{おも}にうつるけしき、又夏は此松の下に船を寄^{よせ}て涼風^{りやうふう}に花火^{ととも}を灯^ふす風

景斜^{けいなめ}ならず。此松、都て弐百余年を経^ふるとそ〕。

『浪花の賑ひ』 三編

松ヶ鼻 大わたし

此所^{このところ}は木津川町の北端^{きはたのはし}にして東^{ひがし}の岸^{きし}は新町通^{しんまちどおり}の西^{にし}にあたれ

り。名木^{めいぼく}の松^{まつ}ありて蒼々^{さうく}たる枝葉川^{しやうかは}の面^{おも}にうつる景色斜^{けしきなめ}な

らず、夏^{なつ}の頃^{ころ}は舟行^{しうかう}の遊人^{いうじん}此松^{このまつ}の下^{もと}に棹^{さほ}さしよせて涼風^{すいかぜ}を

賞^{しょう}し、花火^{はなひ}を焼^{たき}て樂^{たの}しむなど其瞻望^{そのながめ}又比^{たぐ}ひなし。松^{まつ}の下^{もと}に

蛭子祠^{えびすのやしろ}あり、故^{ゆへ}に恵美須^{ゑみす}の松^{まつ}と称^{しょう}す。旧^{もと}は此地^{このち}を笑姿島^{ゑみすじま}と

いひしとぞ。

12 浪花百景

新町店つき【しんまちみせつき】

国員画

『摂津名所図会』 卷之四下

新町傾城廓は新町橋の西方四町をいふ也。往昔天正年中より民家建続き海船の要津となれば、其着船の所々に花魁の家あり。其頃はまだ野原なりしを、寛永年中此地に初て傾城廓官家より御許しあれば、諸方の花魁を壱ツ所にあつめ田圃を闢きて新に町とせしゆへ、世の人新町とよんで柳陌の惣名となれり。其砌に木村亦次郎といふ伏見浪人の願によつて、官より花巷の長をつとめさせらる。此者瓢箪の御馬印を拝領して常に玄関に鏝りしゆへ、通り條を瓢箪町といひ居宅の町を亦次郎と呼ぶ。又、佐渡嶋与三兵衛といふ者上博勞に在て、其頃今の地に移り開発の由緒によつて佐渡嶋町とよび、此西を越後町といふは佐渡越後と国双の故也。吉原町は北天満吉原よりこゝに移すゆへ旧名を呼んで町の名とす。佐渡屋町は船場高麗橋條の佐渡屋何某といふ者、此廓を開きし打余りの地を故有て拝領し壹町一ト家敷とし住けるより佐渡屋町といふ。其次を九軒町といふ。初玉造九軒茶屋を引移して名とせり。今は此地に六軒、新堀町に三軒、佐渡嶋町に三軒斗見ゆるなり。夫此津は海船輻湊の地なればむかしの江口・神崎もこゝに在て長柄傘に高足駄、紋日の道中、身請の門出、一笑千金の花の曙より二千里の月のゆふべも蘭麝のかほり濃にして、歌舞の声糸竹の音洋洋たり。(後略)

※『浪華の賑ひ』は、「66 新町郭中九軒夜桜」(三〇七ページ参照)

13 浪花百景

生玉絵馬堂【いくたまえまどう】

国員画



『浪華の賑ひ』 初編 生玉社



『神道名所図会』 卷之3 難波坐生国魂神社

『摂津名所図会』 卷之三

難波坐生国魂神社〔高津の南にあり〕。(中略)

それ当社は祈雨祭式に難波大社と称じて、生土広く常に詣人多く、道頓堀より天王寺までの中間なれば繁花の地にして、杜頭の賑ひ西の方を遙に見わたりは、市中の万戸・河口の帆ばしら、さながら雲をつんざくに似たり。殊に杜檀近年再営ありて、壮麗にして、きねが鼓の音、鈴の音玲瓏たり。境内の田楽茶屋は手拍子に赤黻膝飄り、門前の池には、夏日蓮の花紅白をまじへて咲乱れ、池辺に眺む床凡には荷葉の匂ひ芳しく、池は湯と成て涼しき蓮などと興し、馬場前の麗情、唐わたりの観物、齒磨売の居合、女祭文、浮世物まね、売卜法印軒端をつらね、切艾屋、作り花店日々に新にして、杜頭の賑ひ市店の繁昌は、みな是神徳の靈驗とそしられける。

『浪花の賑ひ』 初編

生玉社

本社の後辺の舞台より西の方を遙に見わたせば、市中の万戸は薨の波のごとく河口の帆柱筭の繁るに似たり。洋々たる滄海に千船百船の出入白帆の光景、げに類なき眺望といふべし。

又杜頭に桜木多く弥生の幽艶斜ならず、門前の池には夏日蓮の花紅白をまじへて咲乱れ荷葉の匂ひ四方に芳し。

14 浪花百景 源八渡し口

〔げんぱちのわたしぐち〕 国員画

『撰津名所図会』 卷之三

源八渡し口

〔西成郡天満源八町より、東生郡中野村への舟わたしなり〕。

15 浪花百景 北妙けん堤
〔きたみょうけんづつみ〕
国員画

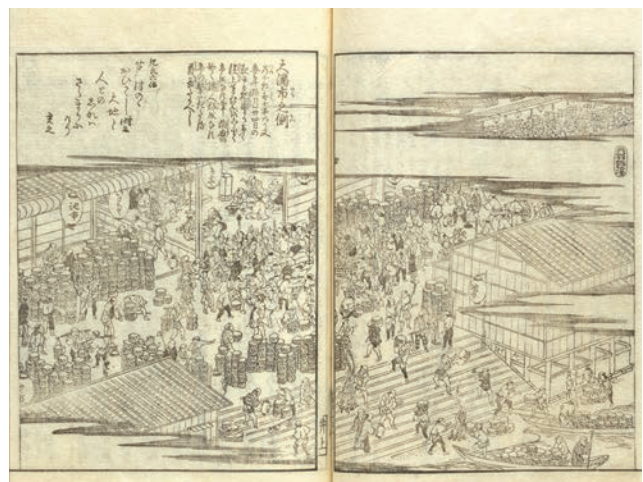
16 浪花百景

天満市場「てんまいちば」

国員画



『浪華の賑ひ』 初編 天満菜蔬市



『摂津名所図会』 卷之4上 天満市の側

『摂津名所図会』 巻之四上

天神橋てんまをものいち 〔市場は天神橋北爪上手より龍田町まで浜側通三町許の間なり。天神橋より下手は市場にあらず。市の側といふ也。世人、天神橋より下手を西市場、上手を東市場といふは謬也。東西の市場、天神橋より上手龍田町までの中にての通称也。問屋四十軒、中買百五十軒といふ〕。

此市場は、日々朝毎に多く人聚りて菜蔬を賣ふ。抑春のあした春日野の若菜より売初、鶯菜・磯菜・嫁菜・杉菜・芥子若菜・落姑・根白草・早蕨・天花菜・独活芽・浜防風・枸杞・五加木・三葉・芹・菠薐菜は木津・難波の名産。天王寺蕪・棕橋・菜蕨・海老江冬瓜・勝間浦の海藻・住吉の神馬草・姫松の麦草・浜村瓠蓄は夜小歌節にて批とかや。伏見孟宗笋・壬生菜・白慈姑・白芋は京より下る。字陀の薯菹・河内蓮根・昆陽池の蓴。葺市・栗市は、九月重陽の前二・三夜は、松明挑灯を多く照らして夜の市めさましかれ。又時雨月上旬には、紀の海士・有田の両郡より蜜柑数百万積来り、師走廿四日まで大市あり。原此市場は往古京橋南爪に於て年久しくありしが、慶安の頃、其所官家の御用地になりて京橋片原町へ引移す。商人の往来に煩ありとて、替地を免許ありて、今の所へ引移りて、日々店々飾り、ゆき、も労がはしきほど市人立ふたかり、かふ人あり、沽人あり、にぎは、しき事は常にたゆむ事なし。(後略)

『浪花の賑ひ』 初編

菜蔬市場あそものいちば 〔天神ばし北詰より東へ浜側通三丁ばかりの間なり、北詰より西を市の側といふ、荒物乾物の店多し〕。原此市場は京橋南詰に於て年久しく有しが慶安の頃其地御用地となりて京橋片原町に引移す。然るに商人の往来に煩ひありとて替地を免され。今の所に移りてより日々に店々を飾り、売買市人鳥の如くに集ひ、鮮の如くに萃り、賑わしき事、常にたゆむ事なし。

天満菜蔬市

此市場は日々朝毎に数万の商人あつまりて菜蔬を売買ふこと恰も潮の湧がごとし。されば初春の若菜より年の暮の菜蕨におわるまで、四季とも怠ることなく、別て秋の松茸栗市冬の蜜柑市等は夜の市にして松明挑灯を数多照していさましく目覚る心ちせらる。

17 浪花百景

住吉高とうろう「すみよしたかとうろう」

国員画



『浪華の賑ひ』 2 編 住吉



『摂津名所図会』 卷之 1 出見浜 高灯炉

『浪花の賑ひ』 二編

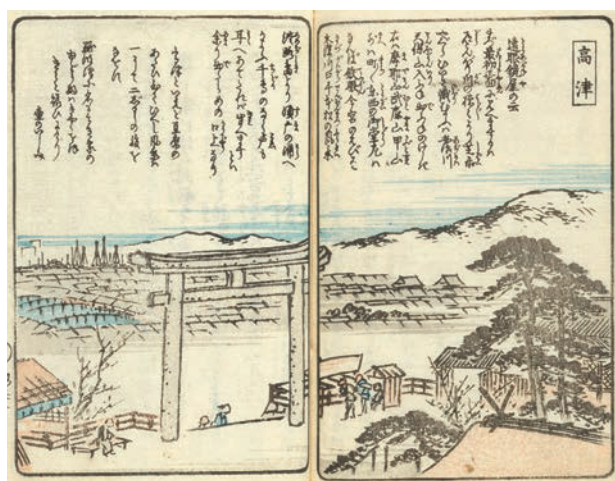
住吉

此所^{このところ}を長映^{ながを}の浦^{うら}といひ松原^{まつばら}の末^{すへ}にある橋^{はし}を長映^{ながを}のはしといへり。滄海^{うなばら}をはるかに眺望^{ながむれ}ば月落^{つきをち}かゝると詠^{えい}
したる淡路島^{あわちしま}山^{やま}をはじめ、左手^{ゆんで}には紀^きの路^ちの山々^{つらな}列^り、右手^{めで}には和田岬^{わたのみさき}須磨^{すま}明石^{あかし}の浦々^{うら}摩耶^ま六甲^{ろくこう}山^{さん}一望^{いちもう}
の中^{うち}にありて其絶景^{そのぜつけい}いふばかりなし。弥生^{やよひ}三日^{さん}の汐干^{しほひ}には貝^{かひ}ひろふ男女^{なんにようち}打群^{うちむれ}ていと賑^{にぎ}わし。

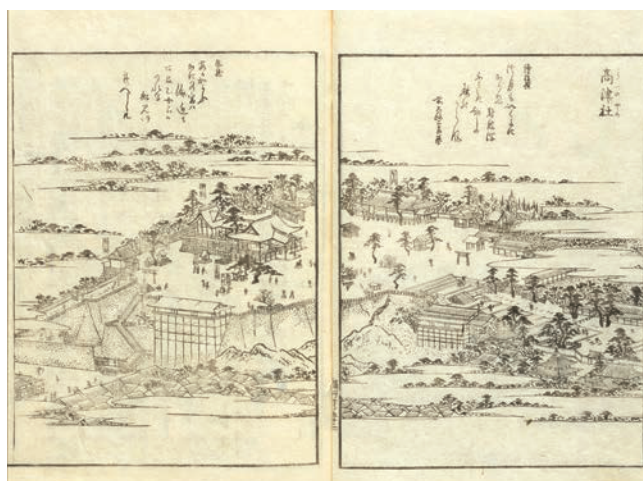
18 浪花百景

高津【こうづ】

芳瀧画



『浪華の賑ひ』 初編 高津



『新進会』 卷之4下 高津社

『撰津名所図会』 卷之四下

高津社かうづのやしろ 「西高津にあり。例祭まつり六月十八日。

秋祭九月十八日」。(中略)

此社頭は道頓堀だうたんぼりの東にあたりて一堆たいの丘山をか

也。遥はるかに眺めば大坂の市涯しがいの万戸ばんこ・川口かはくちの

帰帆きはん・住よしの里・住吉の浦・敷津しきつ・三津

の浦まで一瞬しゆんの中にありて、難波津びくわんの美観

也。常に茶店さてんに遠眼鏡とをめがねを置いて詣人けいを悦おばし

む。柏戸はくこの湯豆腐ゆとうふは世に名高く、石階いしだんの下

の植木店うへきみせは和漢わかんの草木を多く貯たくはて四時花た

へずあるは花塩はなしほ・黒焼店くつやきみせありて常に販はんしき

宮居なり。

『浪花の賑ひ』 初編

高津社かうづのやしろ 「西高津にあり」所祭まつる仁徳天皇にんとくてんわうにして往古高台いにしへたかきやの皇居くはうきよの余風よふうを模うつせり、もつと

も大宮所の旧地きうちは今の御城おんしろの辺なりしが天正年間豊公其地てんしやうねんかんほうこうそのちに府城ふじやうきづきを築給ふにより神社じんじやを此

に遷うつし給ふとぞ、境内けいだいに撰社末社多し高台たかきやの頌碑しようひは本社ほんしやの西傍にしかたわらにあり、平安へいあんの芥煥彦かいくわんけん

章甫しやうほの撰せんする所なり。此社頭は道頓堀だうたんぼりの東にあたりて一准いつたいの丘山をかやまにして遥はるかに眺めば、

浪花らうくはの市街いちまちをはじめ川口かわぐちの出船入舟一瞬でふねいりふねいちしゆんの中にありて風景第一ふうけいだいいちの勝地しょうちなり。鳥居傍とりゐのかたわらには

常に遠眼鏡とをめがねを置いて詣人けいじんを悦よろこばしむ。茶店さてんの湯豆腐ゆどうふは世に名高く、石階いしだん下の植木屋うゑきやには四時

とも花絶はなえんず、殊ことに牡丹ぼたんの花壇くわだんは比類ひるいなき美観びくわんなり(後略)

高津

遠眼鏡屋とをめがねやの云 まづ最初正面さいしよやうめんに見へまするは道とんぼり川の橋々かはより芝居しばいやぐら、ひいき

幟のぼり、むかふは安治川天保山入ふね出ふねのけしき、右は摩耶山武庫山甲山まやさんむこやまかふとやま、前は町々まち

東西とうざいの御堂みだう、左はなんば鉄眼今宮てつげんのえびす木津川口千本松きづがはせんばんまつの風水ふうずい、淡路島あはぢしまより須磨すまの浦うらへ

かよふ千鳥ちどりのなく声こゑも耳みみへあてたれば、聞きこへますとは余り出たらめの口上かみじやうなり

19 浪花百景

梅やしき【うめやしき】

芳瀧画



『浪華の賑ひ』 初編 梅屋敷

『浪花の賑ひ』 初編

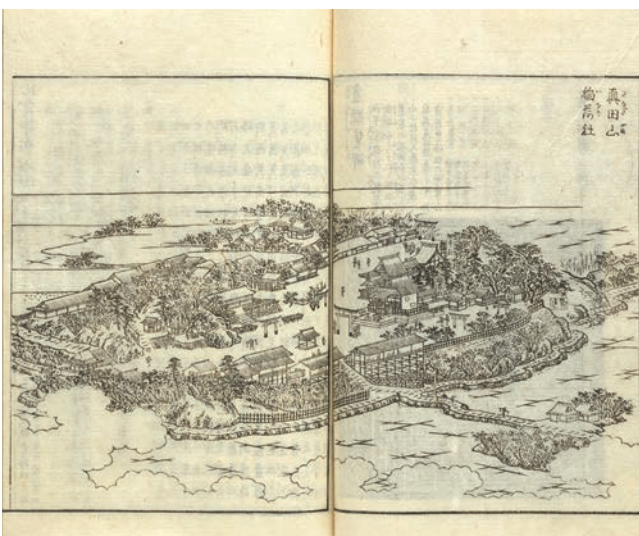
梅屋敷

此地は上の宮より乾の方にして生玉馬場前の東にあり、園中に数株の梅を植つらね樹下に席を設く。さる程に如月の花の頃には清香四方に薫じて道行人も唯に過ることを得ず、もとより風流の好士等むれ集ひて遊観す。又予ては菊を造りて長月のはじめより花壇をひらきて遊客をなぐさむ。実に春秋ともに美景なる勝地なり。原此梅やしきといふは東都亀戸にありて世に名高く聞へたるを、文化初年の頃これを模して斯はなれる所なり。

20 浪花百景

佐奈田山三光宮【さなだやまさんこうのみや】

芳瀧画



『摂津名所図会』 卷之 3 真田山稲荷社

『撰津名所図会』 卷之三

ひめやまいなりのやしろ
嬪山稻荷祠

〔玉造の南にあり。世に真田山といふ。元和の

頃真田の壘こゝにありしとぞ。社説には宰相山といふ。

加賀宰相侯の陣屋此辺にありしより斯いふ也。嬪山は旧名な

り。〔後略〕

『浪花の賑ひ』 初編

宰相山稻荷祠

〔豊津いなりの二丁斗南にあり〕俗に真田山といふ、

元和の頃真田の砦こゝに有しとぞ、社説には宰相山といふ、京極

宰相侯の陣営此辺に有しより斯号くるなるべし、扱また、本殿は

仁徳天皇を祭り稻荷神は本社、傍に勧請す、其末社許多あり、略

之。就中三光宮といへるは奥州青麻に在せる神の遥拝所にして此

に祈誓をかくる者は中風の病難を除せ給ふとて病は原より病ざるも

其難を脱れん事を願ひて歩みを運ぶ徒ら多し。凡て此地は一准の丘山

にして東の方を見わたせば、比叡山の高根に続きて漸々に南に連り生

駒掠ヶ嶺、信貴の山、二上嶽、金剛山より葛城の山々まで一眼に見へ

てまた比ひなき光景なり。

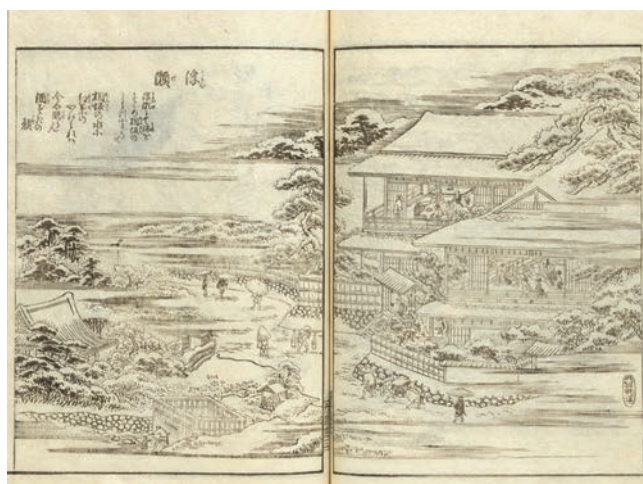
21 浪花百景

増井浮瀬夜の雪【ますいうかむせよるのゆき】

芳瀧画



『浪花の賑ひ』2編 浮瀬



『摂津名所図会』巻之2 浮瀬

『撰津名所図会』 卷之二

浮瀬うかむせといふ遊筵ゆうえんの看楼やしきは新清水しんきよみづに隣となる。原此名もと なは貝觴かいさかつきの銘めいにして、其器き

を見るに、鮑あわせの貝かいの十一の穴あなあるを塞ふさぎて、酒さけをこれに盛もれば七合半盛もれる

也。これに満酌まんしやくして飲あずる人じんを誉ほまれとし、暢醕ちやうかんてう牒だを出しし其名なを署しるす。これ風俗ならはせ

なりとぞ。(後略)

『浪花の賑ひ』 二編

浮瀬

此遊宴このいうゑんの楼ろうは新清水しんきよみづの坂さかの下もとにありて風流ふうりうの席せきなり。

遥はるかに西南せいなんを見わたせば海原わだのはら往来ゆきこふ百船も、ふねの白帆しらほ、淡路島あわぢしま

山やまに落おちかゝる三日みかの月つき、雪ゆきのけしきは言いふもさらなり。

庭中ていちうには花紅葉はなもみぢの木々き々春秋しゆんじうの草々くさくさを植うゑて四時しいぢともに

眺ながめに飽あかざる遊観いうくわんの勝地しやうちなり。名なにしおふ浮瀬うかむせ幾瀬いくせの

貝觴かいさかつきをはじめ種々しゆくの珍觴ちんじやう、又七人しやうぐ狸をほ々の大さかづき

等を秘蔵ひぞうす。浪花らうかはに於をひて貨食家りやうりやの魁くわいたるものなり。

22 浪花百景

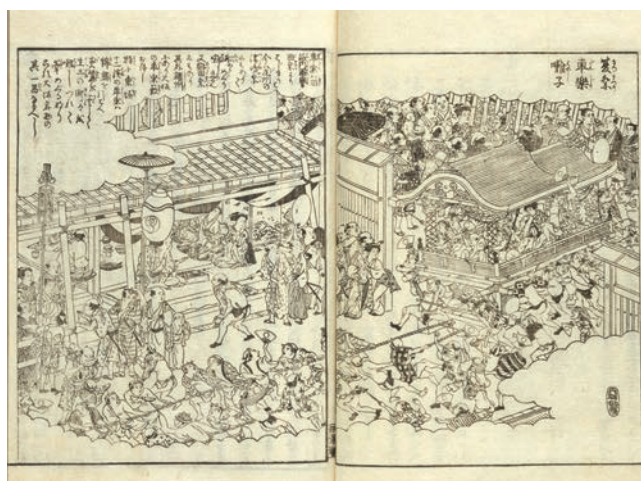
天満天神地車宮入

『てんまてんじんだんじりみやいり』

芳瀧画



『浪華の賑ひ』 初編 天満天神



『摂津名所図会』 卷之4上 夏祭車楽囃子

『摂津名所図会』 卷之四上

『浪華の賑ひ』 初編

なつまつりだんじりはやし
夏祭車楽囃子

だんじり
車楽は、旧河内国誉田祭よりはじまりて、

今は尾州の津嶋祭にもありて、船にため

ぐり囃し立る也。又、熱田祭にもあり、

其外諸州にあり。大坂の車楽は数おほし。

特に東堀十二濱の車楽は錦繡を引はへ、

美麗を尽して、生土の町々を囃しつれぐ

牽めぐるなり。これ大坂名物の其一品な

るへし。

てんまてんじんのやしら
天満天神社

〔天神橋通より一丁東の筋正面なり、門前より一丁此方に石の大鳥居あり〕

此地を天満と号する事は天満大自在天神鎮座し給ふ故なり。所祭、本社中央には大自在

天神相殿の東には手力雄命法性坊尊意、西には猿田彦大臣蛭児尊等なり。其余境内に

末社多し略之。此地は往昔北西に続きし松原なりしが人皇六十二代村上天皇天曆年間神

託にまかせ勅願あつて建立し給ふ所なりとぞ、故に天神の松原、或は天神の森など古書に

見へたり、さる程に靈驗あらたなれば四時に詣人間断なく遠近より群集へば、社内には昔

嘶、或は軍書講釈の小屋、地上には放下師品玉輕業の芸、時行唱歌の読売、其余菓子類

手遊具の出店など地せまきまで列りて朝暮の繁昌いわん方なし、門前には貨食家、煮

売店、鮓屋、饅頭・木菓売り、珍奇器物の商家軒をならべて数販ぎて饒わへるは皆菅神

の余光といふべし（後略）

天満天神

菅神の聖廟多かる中に別て当社は他に起て靈驗あらたなるにより、遠近の貴賤常に詣して

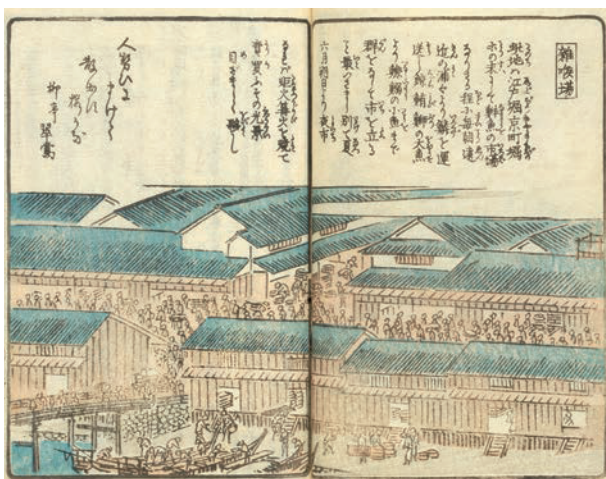
間断なく社頭の繁栄浪花第一といふべし。例月廿五日参詣群をなせり。就中正月は初天神

とて詣人往来の道に満て錐を立るの寸地なく、実に初春の大紋日なり。

23 浪花百景

雑喉場「ざこば」

芳瀧画



『浪華の賑ひ』 3 編 雑喉場



『撰津名所図会』 卷之 4 下 雑喉場魚市

『摂津名所図会』 卷之四下

『浪花の賑ひ』 三編

雑喉場の市は、毎朝遠近の浦々より鱗をこゝに運びて鯿・鰯の小魚より鯨・鯢の大魚あるは左大沖

雑喉場

が都賦に書し類まで群をなして市を立る也。抑此市の始は豊太閤御城を営給ひ列侯薨をつらね給ふ

時、山城伏見の民家命を蒙りて此地へ多く引移りて万物の買人交易して繁昌の地となる。今の伏見町

これ也。諸魚も御城の西にて市をなす。其売詞に安しと高声に喚る。秀吉公御通駕の時其売声

御耳に入、安くとは矢の巢の売声ならんか。それならば鞆といふべき也と宜ふ。因茲其町の名を

鞆と号く。今の本鞆町是也。都て交易の場を問屋・問丸といふ事は万の市諺を問合するにより名と

せり。其初は鮮魚問屋十八軒に極れり。今の雑喉場はむかし鷺嶋といふ所也。其後慶安承応の頃は

鮮魚問屋、安土町・備後町のほとりにあり。今の上魚屋町也。こゝに於て市を立る。これを沖上りと

いふ。三月より十月迄は温気なれば、上魚屋町へ運送しぬれば鮮も鰯ぬれば、今の雑喉場へ浮舗を

出しこゝにて毎朝市を立る也。十月より三月までは本肆にて賣ふ。厥后延宝の頃より西南浦々の漁人

本舗へ運送するを厭ひければ、遂に元舗を今の地へ引移し、永こゝにて鮮魚の市を立る事となれり。

初鞆町生魚・乾魚の問屋のわいたためもなかりしが、後世別れて阿波座へ引移し今新鞆町といふ。

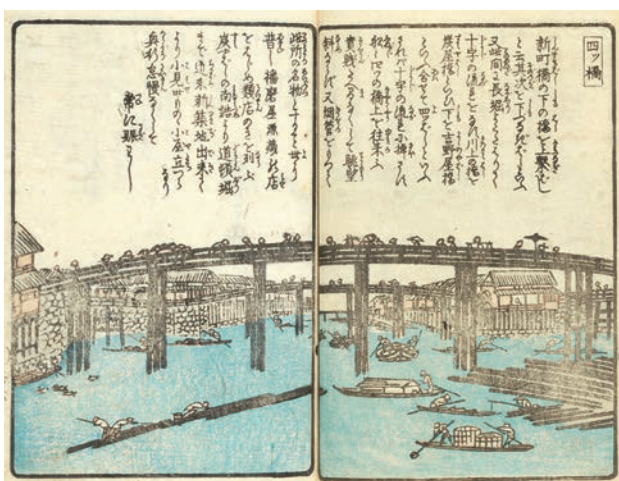
(後略)

此地は江戸堀京町堀等の末にして鮮魚の市場なり、さる程に毎朝遠近の浦々より鱗を運送し鯨・鰯の大魚より鰯・鰯の小魚まで群をなして市を立ること最つままし。別て夏六月朔日より夜市なれば炬火篝火を焼て売買ふその光景目ざましく夥し。

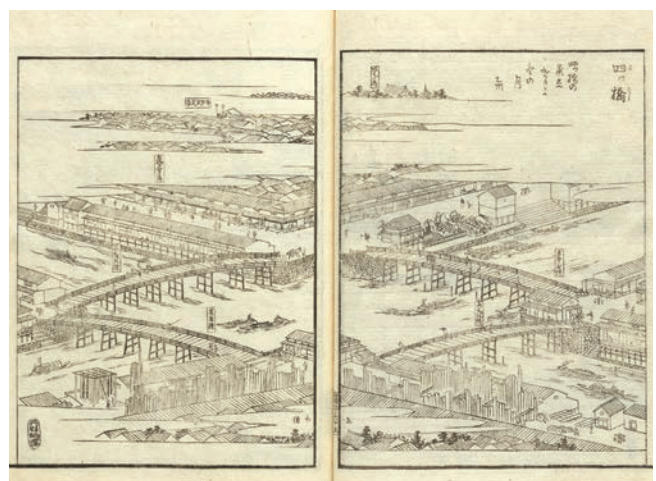
24 浪花百景

四ツ橋「よつばし」

芳瀧画



『浪華の賑ひ』 3 編 四ツ橋



『摂津名所図会』 卷之 4 下 四ツ橋

『摂津名所図会』 卷之四下

四ツ橋よ ばし 「西横堀に上繫橋・下繫橋、長堀に吉野屋橋・炭屋橋あり。これ

を合あて四ツ橋といふ。二流十文字になりて橋を四方に架わたすなり。四ツの橋の
行人かうしん、漕こぎわたる船の往来ゆきもたへ間まなくして風景斜なぐめならず。こゝに源藏張げんざうばりとて
煙管きせるの店あり。世に名高し。四ツ橋を以て煙管きせるの銘とするなり」。

(後略)

『浪花の賑ひ』 三編

四ツ橋

新町橋しんまちばしの下しもの橋を上繫かみつなぎばしと云、其次そのつぎを下つなぎばし
といふ。又此間このあひだに長堀よこたはりて十字じうじの流れをなす。

川上かはかみの橋を炭屋橋すみやばしといひ、下しもを吉野屋橋よしのやばしといふ。合あせ

て四ツよばしといふ。されば十字じうじの流れに棹さほさす船々ふねぐ、

四ツの橋上きやうしやうを往来ゆきかふ貴賤きせんたへ間まなくして、眺望斜てうもうなぐめなら

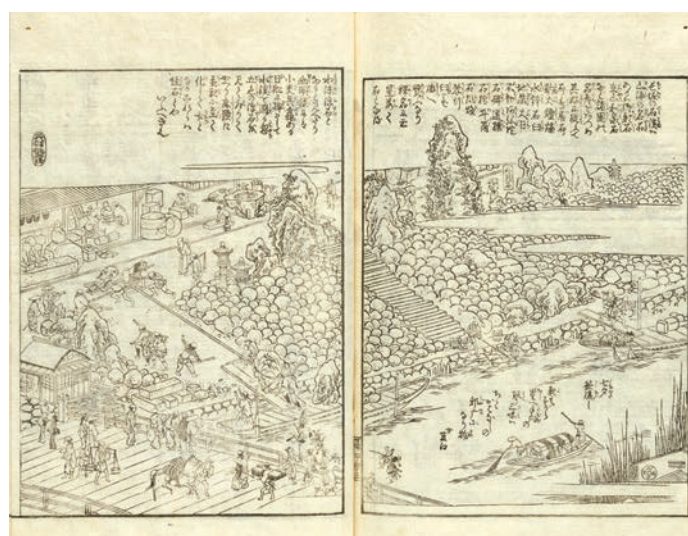
ず。又煙管きせるをもつて此所このところの名物めいぶつとすること世よに普あまねし

播磨屋源藏みせの店をみせはじめ類店るいてんのきを列ならぶ。炭やばしの

南詰みなみづめより道頓堀だうとんぼりまで近來新築地ちかごろしんつきで出来てより、小見世こみせ

もの、小屋立こやたちつらなり興行怠慢かうげうたいまんなくして常つねに賑にぎわし。

25 浪花百景 長堀石浜【ながほりいしはま】 芳瀧画



『摂津名所図会』 卷之4 上 （長堀の石浜）

『摂津名所図会』 卷之四上

ながほり いしはま
 長堀の石浜は、さんかい めいせき
 山海の名石あるは御影石・立山和泉石など、
 しよく めいさん
 諸国の名産をあつめ其は好に従ふて、石の鳥居・石の駒犬・燈爐・
 みづばち
 水鉢・石臼・地蔵・大日不動・阿弥陀・石碑・道標・石橋・井筒・石風爐・孝行臼まで拵へ商ふなり。（後略）

26 浪花百景 今宮蛭子宮【いまみやえびすのみや】 芳瀧画

『摂津名所図会』 卷之三

いまみやのやしろ
 今宮社 「今宮森にあり」。(中略) 毎歳正月十日は大小群参して福德を禱る。(中略) 社頭には米花袋・蜈蚣小判・米俵・白銀包等の目出度作り物を多く売なり。下向の輩これを例として買求め、筐の枝に結びつけて売所の烏帽子を求めて頭に戴き酒機嫌に往来を笑はせ興ずるなり。筐の枝は家の内に挿て富貴繁昌の先表とする事風俗とするなり。此日浪花の市中稼穡を休て十が六七は参詣す。無なるは戸を戸ざしても参る其道筋道頓堀側の芝居・観物・貨食屋等大に賑はし。京師稻荷神社初午参りに比したるなん。(後略)



『摂津名所図会』 卷之3 十日蛭子

27 浪花百景 広田社〔ひろたのやしろ〕

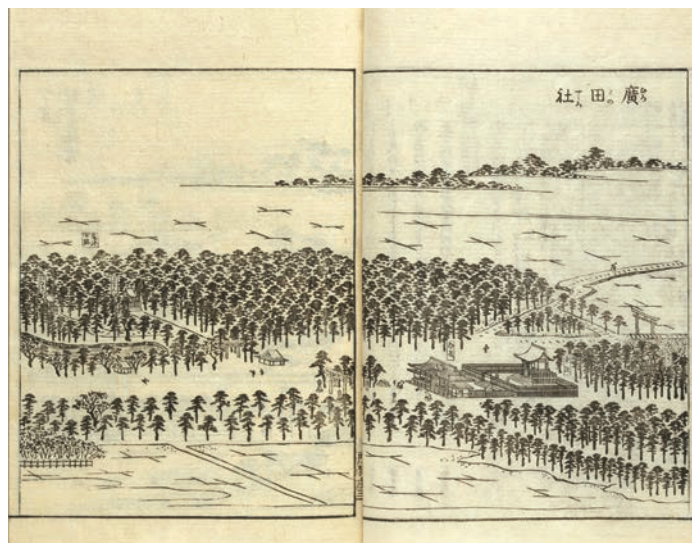
芳瀧画

『摂津名所図会』 卷之三

ひろたのやしろ
広田社
〔今宮いまみやの北にあり。ひろたのもり。此社も天王寺の鎮守也とぞ。例祭三月廿三日、神拝・音楽あり。祭神さいじん 天照太神、荒魂也。摂社に祇園社・稲荷祠あり〕。(後略)

『浪花の賑ひ』 一二編

ひろたのやしろ
広田社
〔戎社の北にあり〕まつるところてんしやうだいじん あらみたま
所祭天照大神の荒魂なり、例祭三月廿三日且九月十八日流鏑馬の神事は当社と戎社と両所の祭祀なり。社前の西側に萩の茶屋として庭中に紅白の萩を植つらね遊客を悦しむ。



『摂津名所図会』 卷之3 広田社

28 浪花百景 長堀財木市【ながほりざいもくいち】

芳瀧画

『摂津名所図会』 卷之四下

ながほりざいもくはま
長堀材木浜

関西・土佐及び日向より諸材をこゝに積上せて、朝の市に数千金を商ふ也。其場所長堀・堀江・道頓堀川の浜辺にて、所せくまで双へそれくの印を見て、市を立る也。近久平又などいふ其長たる家こそ聞へし。按ずるに此津は諸州より積来る雑貨何によらず数の多きを喜とし、少きを愁とす。これ捌方の自在なるによりて也。



『摂津名所図会』 卷之4下 長堀材木浜

29 浪花百景

森の宮蓮如松【もりのみやれんによのまつ】

芳瀧画



『摂津名所図会』 卷之3 森宮

『撰津名所図会』 卷之三

森宮 もりのみや 「玉造森村にあり。委は鵲森なるへし。日本紀、推古天皇六年

夏四月、鵲二喉 かさぎ こう を難波の杜 なには もり に養しむとは、則 すなはち 此地也。明応の頃此辺に

本願寺御堂あり。信長 のふなか と和融 わゆう の後、紀州雜賀 きしゅうさいか に退去 たいきよ す。然れども旧名を

呼んで紀州に於ても今に鵲森御堂と称す。〔中略〕

蓮如上人 れんにょ いのりの 祈松 いのり 「社前にあり。蓮如上人此松下に座して、当社の神并

に上宮太子に、一宗海内 かい に弘通 くつう し信心の門徒繁昌 はんしやう を禱 いの り給ふとなり。又

玉造りの内に蓮休寺といふ本願寺末派の道場あり。蓮如上人 れんにょ いのり 往來 わうらい の時、

こゝに休給ふゆへ此名を呼ふ。今は休 やすみ の字を久と改めしとぞ。』

『浪花の賑ひ』 初編

森宮 もりのみや 「猫間川の傍にあり、玉造森町といふ」所祭用命 まつるところようめい

天皇 てんわう 「人皇卅二代」にして聖徳太子の御父帝 おんち、みかど なり、日本紀 にほんぎ

に、推古天皇六年夏四月鵲二喉 かさぎ こう を難波の杜 なには もり に養しむと有 ある

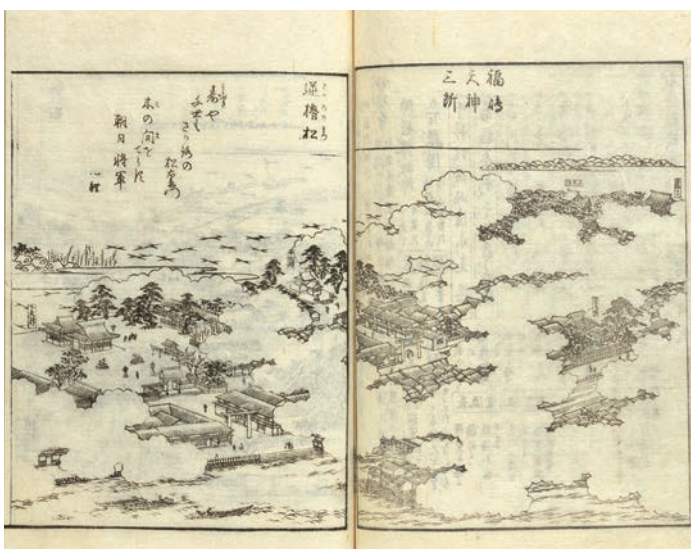
則 すなわち 此地 このち なりといふ、撰社末社境内 せつしやまつしやけいだい に多 おほ し、亀井水旧跡 かめいのみづのきうし

蓮如上人 れんにょ いのり 祈松 いのり といへる大樹等 たいじゆとう あり。

30 浪花百景

福しま逆櫓松【ふくしまさかのまつ】

芳瀧画



『摂津名所図会』 卷之3 福嶋天神三所 逆櫓松

『撰津名所図会』 卷之三

逆櫓松 さかのまつ 「上福嶋橋爪町杉本氏別荘 ふくしま にあり。元暦の頃、廷尉義経、梶原景

時、逆櫓 さかろ の論ありし所にや。大樹 たいしゆ にして株 みき の形驚蛇 かたちきやうしやに 似て千載 せんさい を歴ぬらん

名松 めいしやう と見へたり。又此松の北の方、嶋田氏 しまだ の家に近曾 さいつこう 大木 たいぼく の丹楓 もみぢ あり。高

十三間、南北の枝 えだ 甘間計 かんまけい あり。惜哉 おしいかな、明和九年に枯 かれ て今なし。〔後略〕

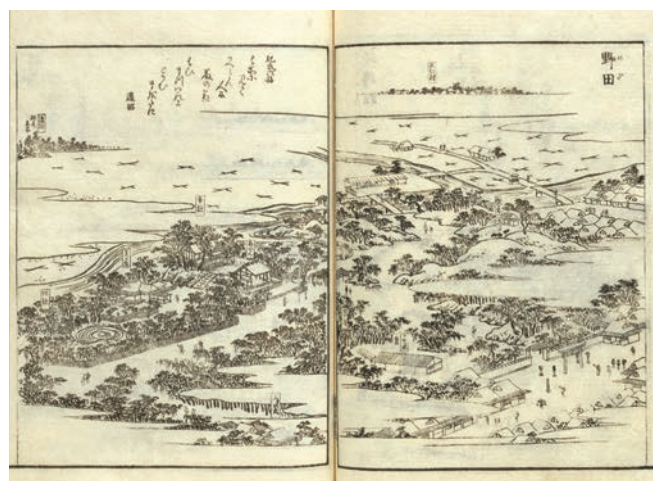
31 浪花百景

野田藤「のだふじ」

芳瀧画



『浪華の賑ひ』 3 編 野田藤



『摂津名所図会』 卷之 3 野田

『撰津名所図会』 卷之三

野田藤 のたのふち

〔春日の林中にあり。むかしより紫藤名高くして、小歌節にも、

吉野の桜・野田の藤と唄へり。弥生の花盛には、遠近こゝに来て幽艶を賞

す。茶店・貨食店ところ／＼に出して賑ふなり〕。（後略）

『浪花の賑ひ』 三編

野田藤

此地は下福嶋の西北にあり、紫藤多く林中の古松にまと

ひていと風流也。花盛の頃は遠近の雅俗こゝに来て

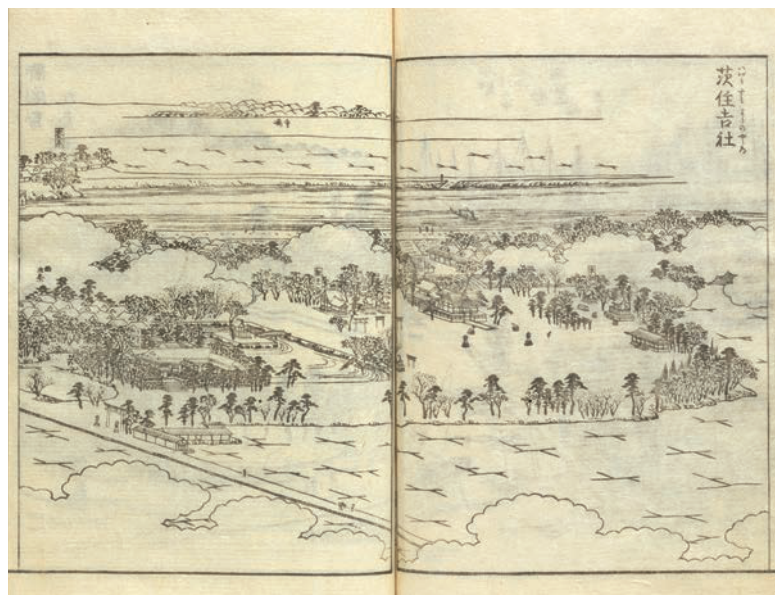
幽艶を賞す。樹下に春日の祠、又傍に藤の菴といへる

あり。豊太閤御遊覧の古跡なりといふ。

32 浪花百景茨住吉〔いばらすみよし〕 芳瀧画

『摂津名所図会』 卷之三

茨住吉社 いはらすみよしのやしろ〔衢壤島にあり。当村安治川町の生土神とす。例祭六月廿九日〕。
祭神 さいしん〔底筒男・中筒男・表筒男・神功皇后の四座也。末社は貴布祢・龍田・船玉・
天満宮を祭る。住吉郡本宮に属す。伝云、寛永元年衢壤島開発の時、香西哲雲こゝ、
に勧請すといふ。初め此地に茨多く生しけるより茨住吉といふ。一説に冤原郡住
吉の神を勧請すともいふ。何れかその是非をしらす〕。



『摂津名所図会』 卷之3 茨住吉社

『浪花の賑ひ』 三編

茨住吉社 いはらすみよしのやしろ〔同所の南にあり〕。境内の池に
杜若多く、板橋を蜘蛛に架て風景よし、花盛
の頃は諸人群集して賑わし。

33 浪花百景 松屋呉服店〔まつや呉服店〕

芳瀧画

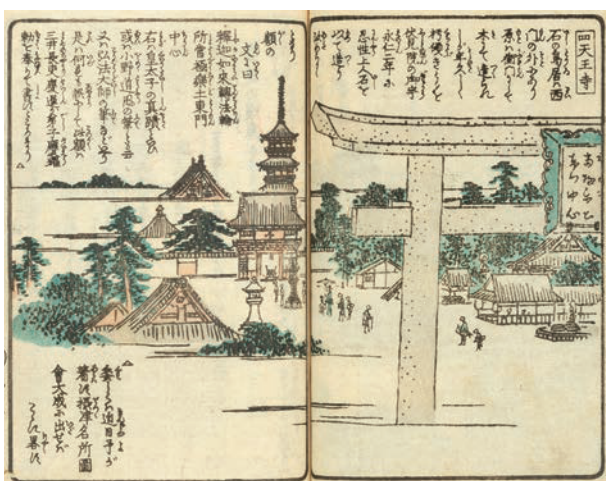


『摂津名所図会』 卷之 4 下 心齋橋筋呉服店松屋

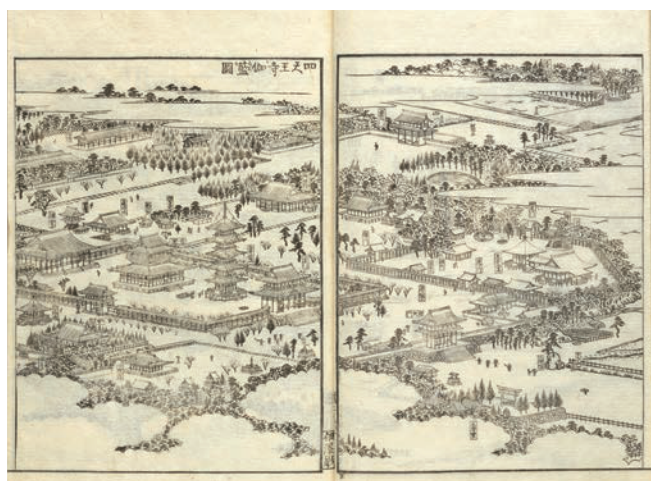
34 浪花百景

四天王寺〔してんのうじ〕

芳雪画



『浪華の賑ひ』 2 編 四天王寺



『摂津名所図会』 卷之 2 四天王寺伽藍

『撰津名所図会』 卷之二

荒陵山四天王寺敬田院 「東生郡にあ

り。宗旨八宗兼学、今時天台宗江府東叡山

日光御門跡に属す。一名難波寺、又難波大

寺、又御津寺、法花園、又堀江寺、又荒

陵寺ともいふ。(中略)

夫当山は上宮太子の御草創なり。由来は

太子伝にありて世の知る所なれば、委記

するに逮ず。(後略)

『浪花の賑ひ』 二編

荒陵山四天王寺 「一心寺門前の東に石の鳥居あり」。当山は聖徳皇太子の御草創なるこ

とは世の知る所なれば委く記するに逮ず、金堂、講堂、六時堂、五重大塔をはじめ諸堂

境内に薺々たり、年中法延間断なく四時ともに詣人繁し、就中二月涅槃精霊会を大会と称

す、又春秋両度の彼岸会、七月千日詣等は殊更に群参して雲霞のごとし。

四天王寺

石の鳥居は西門の外にあり、原は衝門にして木にて造られしが年久しく朽傾きくるを、

伏見院の御宇永仁二年に忍性上人石を以て造り改めらるゝ。となり額の文に曰、釋迦如來

転法輪 所当極樂土東門 中心右は皇太子の真蹟といひ、或は小野道風の筆とも云、又は

弘法大師の筆などいへり。是は何れも誤にして、此額は三井長史慶進が弟子慶耀勅を奉り

て書すところなり。委しくは近日予が著す撰津名所図会大成に出せばこゝに畧す。

35 浪花百景 四天王寺合法辻〔してんのうじがっぼうがつじ〕 芳雪画

摂津名所図会 卷之二

合法辻 かつほうかつち 「相坂清水の西の辻也。焰魔堂あり。実は学校辻なり。
むかしここに天王寺の学校院ありし古蹟といふ」。

『浪花の賑ひ』二編

合法辻 がうほうつつち 「相坂の清水の西の辻をいふ」。小堂ありて石
の焰魔王を安す、一説に実は学校辻にして往古こゝに
天王寺の学校院ありし古蹟なりといふ。



『摂津名所図会』 卷之2 合法辻焰魔堂

36 浪花百景 河堀口【こぼれぐち】 芳雪画

『浪花の賑ひ』 二編

関帝堂くわんていどう〔東門の東清寿院にあり〕。黄檗派わうはくはの
禪刹ぜんてらにして堂舎だうしや唐山とうざんの風ふうを模もせり。蜀関羽しよくのかんうの像ざう
を祀まつる。応騒おうげんいちじるしと云いふ。是これより南方みなみのかたを
河堀口かわほりぐちと号がうし浪花なにわより平野ひらのに至いたる街道かいだう也。此地このち
は大峰山おほみねさん上参詣さんけいの同行どうぎやうを送おくり又は帰国きこくを迎むかふ
るの立場たちばなるゆへ、若松屋わかまつや・元松屋もとまつやなどいへる
奇麗きれいなる茶屋ちややあり。原来もとより河内かはちに赴おもむく道條みちすじなれ
ば、葛井寺かづみでらに到いたる巡礼じゆんれいの旅客たびぎと、道明寺だうみやうじに参まゐる
浪華らうくはの講中かうぢう、河内通かはちがよひの木綿買もめんかひ、大和縞やまとじまの仕
入屋いれやなど此所このところを往來わうらいして四時しいじとも賑にぎわし。

37 浪花百景 生玉弁天池夜景【いくたまべんてんいけよるのけい】 芳雪画

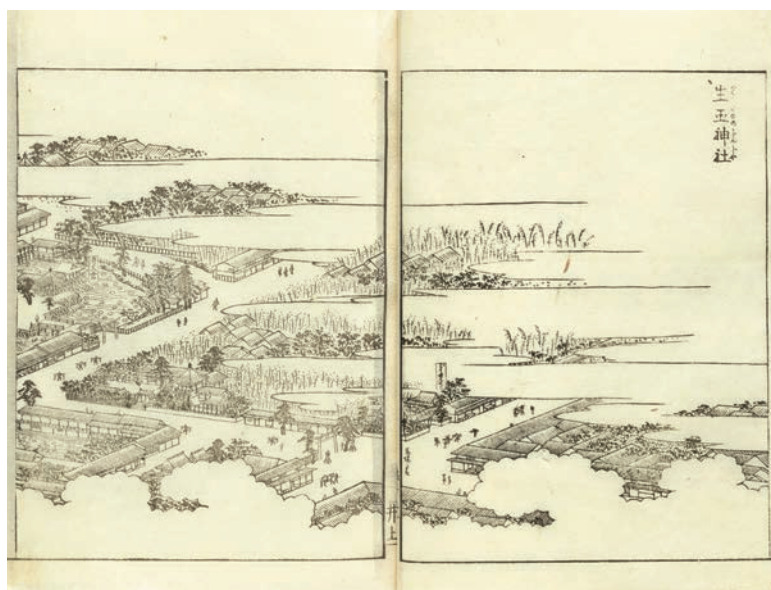
『摂津名所図会』 卷之三

なにはにいますいくくにたまのかみのやしろう
難波坐生国魂神社 (中略)

弁財天祠 〔活玉社境内門前北側にあり。伝云、むかし海中出視の霊像也とぞ。毎年正月七日富会あり〕。

『浪花の賑ひ』 初編

弁財天祠 〔生玉門前の北の傍にあり〕。伝云、むかし海中より出現ありし霊像なりとぞ、社頭に蓮池ありて夏日には紅白の花咲みだれて美観なり。



『摂津名所図会』 卷之3 生玉神社

38 浪花百景 道頓堀 太左衛門橋雨中

『どうとんぼりたざえもんばしうちゅう』 芳雪画

『浪華の賑ひ』 二編

道頓堀 だうとんぼり 「大坂の南方にして東堀の下より西に曲りて都合十橋の下を流れて木津川に入り海に会す」。芝居側といへるは日本橋にほんばしより西戎橋までの間にして東の第一にあるを竹田たけだと号し、竹田近江たけだあふみが機振からくりの座なり。今、浄留理或は歌舞妓等興行して定ることなし。

第二を若太夫わかたいふと号け豊竹若太夫とよたけわかたいふが戯棚座なり。今は歌舞妓をも興行す。第三を角かどの芝居しばゐといふ。大坂太左衛門の歌舞妓座にして世に大芝居おほしばゐと称す。第四を中の芝居なかしばゐといひて塩屋九郎右衛門しほやくろゑもんが歌舞妓座なり、是も大芝居おほしばゐにして角中の両座は古来よりの例式ありて他の座の及ばざること種々さまざまあり。第五を筑後ちくごと号す。是は竹本筑後たけもとちくごが戯棚座なり。（中略）四時ともに興行絶ず、爾しかのみならず此辺りは住吉天王寺すみよしてんわうじをはじめ寺社参詣の道條みちすじといひ月雪花見つきゆきはなみ菊紅葉きくもみぢ、怪我けがして通ふ難波なんばの療治月々の灸治りやうじつきくやいとすへまで、少しの道の損益そんえきを論ぜず此を廻りて往返なせば貴賤肩きせんかたを摩合すれあひて賑わしき事こと双なく浪花第一の繁昌はんじやうなり。

39 浪花百景十三中道【じゅうそうなかみち】

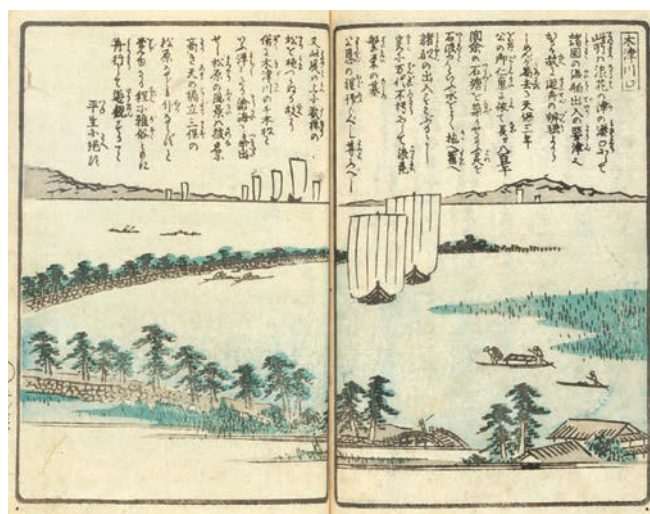
芳雪画

40 浪花百景 木津川口千本松「きづがわぐちせんぼんまつ」 芳雪画

『浪花の賑ひ』二編

木津川口

此所は浪花の津の湊口にして諸国の海船出入の要津也。かかる故に廻舟の弁理よからしめんが為、去る天保三年公の御仁恵に依て長さ八百七十間余の石塘を築かせ給ふ。是を石波戸といふ。水をよく抱へ蓄へ諸船の出入すこぶるよし。実に万代不朽にして浪花繁栄の基公恩の程仰ぐべし尊ふべし。又此堤は上に数株の松を植つらぬる故に、俗に木津川の千本松といふ。洋々たる滄海に築出せし松原の風景は、彼名に高き天の橋立三保の松原なども外ならずと覚ゆ。さる程に雅俗ともに舟行して遊観すること平生に絶す。



『浪華の賑ひ』2編 木津川口

41 浪花百景茶臼山〔ちやうすやま〕 芳雪画

『撰津名所図会』 卷之二

荒陵 あれみさき 「今茶臼山といふ。形をもつて異名とす。慶長元和の頃
御陣営となる。荒陵の号は仁徳天皇より以前の号也」。(後略)

『浪花の賑ひ』 二編

茶臼山

此地は天王寺の西南にあたりて一心寺の後なり、旧の名荒
陵といふ。慶長元和の年間御陣営となる。是より後当山に
登ることを禁ぜらる。(後略)



『浪花の賑ひ』 2編 茶臼山

42 浪花百景 うらえ杜若〔うらえかきつばた〕

芳雪画

『浪花の賑ひ』 三編

歓喜^{くわんぎ}天堂^{てんどう} 「五百らかんの北、南浦江村に有」。俗^{ぞく}

に浦江^{うらえ}の聖天^{せうてん}といふ。寺^{てら}を了徳院^{りやうとくいん}と号^{がう}す、詣人^{けいじん}平生^{つね}

に間断^{かんだん}なし。境内^{けいだい}の池^{いけ}に燕子花^{かきつばた}多く、花^{はな}の盛^{さか}りには、

紫白^{しはく}相交^{あいまじ}りて、美観^{びくわん}なり。都下^{としか}の老若^{らうにやく}、野辺^{のべ}に摘草^{つみくさ}

し、此^{こゝ}に集^{つど}ひて、光景^{くわうけい}を愛^{あい}す。

43 浪花百景

寛満寺之夕景【かくまんじのゆうけい】

芳雪画



『浪花の賑ひ』2編 寛満寺

『摂津名所図会』 卷之三

鶴満寺 くわくまんじ 「南長柄にあり。天台律宗雲松山慈祥院と号す。近州

坂本西教寺に属す」。

本尊阿弥陀仏 みたく 「慈覚大師の作、長四尺計。地藏尊側に安す。開

基は久遠にして詳ならず。中興忍鎧上人延享年中の再建也」。

百体観音 ひやくたいくわんおん 「秩父坂東西国等の巡礼所、凡て百体の観世音を安

す。又堂下に其国々の観音堂の土を聚てこゝに布て建るなり」。

梵鐘 つりかね 「長門の国主毛利侯より寄附なり。往昔城下の辺土中より堀

出す。鑄銘・彫銘あり」。(後略)

『浪花の賑ひ』 初編

雀満寺

天満十丁目すじの北にあり、南長柄といふ。当寺の梵鐘は、長

州侯よりの奇附にして原は唐土の器物なり。鑄銘に云、大平十

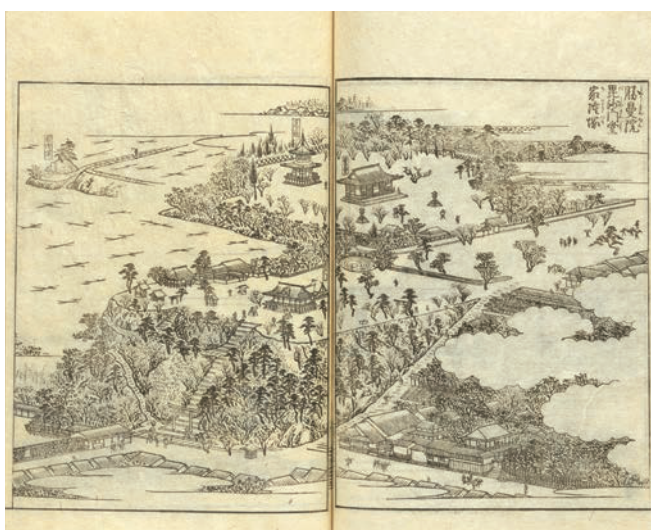
年二月云々。又境内に糸桜の大樹ありて、花の盛には幽艶にし

て騷人墨客打むれて風流に乗ず。

44 浪花百景

勝曼院愛染堂【しょうまんいんあいぜんどう】

芳雪画



『摂津名所図会』 卷之2 勝曼院 毘沙門堂 家隆塚

『摂津名所図会』 卷之二

勝曼院 しやうまんゐん

〔西門の北西にあり〕。愛染明王 あいせんみやうわう 〔安置す。太子此道場に たうしやう

於て勝曼經講讃 しやうまんかうさん あり。故に名とす。毎歳六月朔日、本尊を開扉 かいひ す。

諸人大に群 ぐん をなせり〕。

多宝塔 たほうたう

〔院中にあり。二層塔 そうのたう なり。大聖金剛 たいしやうこんがう を安置す〕。

『浪花の賑ひ』 二編

勝曼院 しやうまんゐん

〔家隆塚南にあり〕。本尊愛染明王 ほんぞんあいぜんみやうわう 左の脇檀 わきだん に勝曼 しやうまん

夫人 ふにん を安置 あんち し多宝塔 たほうたう には大日如來 だいにちによらい を安 あん ず、例歳 れいさい 六月朔日 むつき には

本尊開扉 ほんぞんかいひ 有て衆人大に群 しゆじんおほひぐんさん 参す、俗 ぞく に愛染祭 あいぜんまつり と称す、六月の紋日 もんび

始 はじめ なり。

45 浪花百景 しりなし漆づつみ甚兵衛の小家

「しりなしうるしづつみじんべえのこや」 芳雪画

『浪花の賑ひ』 三編

尻無川 しりなしがは

〔竹林寺の門前の川下をいふ〕。此堤に黄櫨多く列れり。紅葉の頃は錦色川水に映じ瞻望又

類なし。騷人墨客多く舟行し光景を賞す、又春弥生の潮干には蛤蜊を取んとて群来る人夥し。

46 浪花百景 堀川備前陣家
〔ほりかわびぜんじんや〕 芳雪画

47 浪花百景 安居天神社【やすいのてんじんのやしろ】 芳雪画



『摂津名所図会』 卷之2 安井天神

『摂津名所図会』 卷之二

安井天神 [相坂の上にあり。祭神少彦名命。毎歳八月廿日神祭あり。これを芝原祭といふ。今天満宮と称して、諺に、菅公筑紫左遷の御時こゝにしばしやすらひ給ふゆへ此名ありとぞ。境内に連歌所を建て、月並廿五日に社役の連歌あり。天津神を天満宮と紛らし称する事所々にあり。]

『浪花の賑ひ』 二編

安居天神社 [相坂の上にあり 安井といふ]。所祭少彦名尊にして毎歳八月廿日神祭あり、是を芝原祭といふ。今は天満宮と称し菅公とす。一説に菅公筑紫に左遷の御時こゝにしばし休らひ給ふにより斯は号くといふ。此地は小高き丘にして眺望よく且社頭には数株の桜ありて花の頃は一しほに賑わし。西の山下に安井の清水あり、此辺名水の一なり。又当社の南門の西の方に相坂の清水、北坂の下に増井の清水あり、ともに名泉なり。

48 浪花百景 広田星力池稻荷〔ひろたほしがいいなり〕 芳雪画

『撰津名所図会』 卷之三

星ヶ池 ほしかいけ 〔今宮の裏門の北にあり。今は水涵て田と

なり、太子伝云、焚惑星 けいわくせい 此池に降りて連八嶋 むらしやしま といふ

ものに託 たく して唄 うた ふ。其言葉 そのことは に云〕。

夫木

あまの原南にめくるひなつ星

なにの草ともとよさとにとへ

〔とよさととは聖徳太子の御事也。八嶋これを奏 そう す

れは、太子宜 のたま ふは、天に五緯 い 有、焚惑屋 けいわくせい は五行の中

の南 みなみ を司 つかさど どりて、色赤く火なりと答 こたへ たまふ事、太子

伝に見えたり。此池の証とする事詳ならず〕。

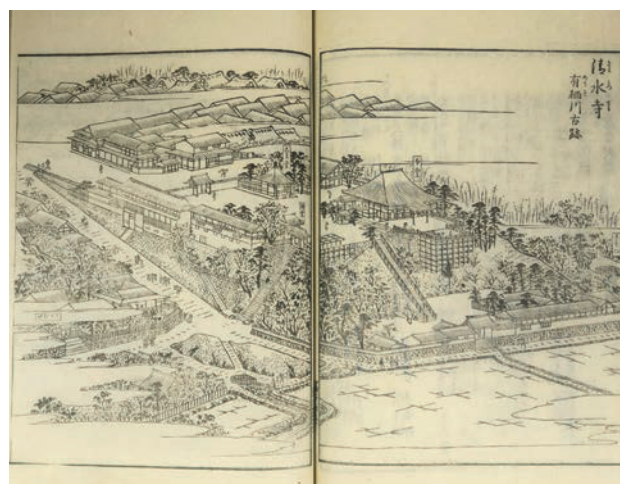
49 浪花百景

新清水紅葉坂瀧【しんきよみずもみじざかたき】

芳雪画



『浪華の賑ひ』2編 新清水



『摂津名所図会』巻之2 清水寺 有栖川古跡

『摂津名所図会』 卷之二

有栖山新清水寺

〔天王寺の西にあり。初は有栖川寺と号す。む

かし斎宮女御難波の祓所田簀嶋にてありし也。洪水の時、此有栖

川に修し給ふ。本尊十一面千手観音 〔聖徳太子の御作。脇士

は地藏・毘沙門天を安ず。又側に天満宮、子安地藏尊を安置す。

開基は延海阿闍梨にして、寛永十七年京師音羽山清水寺より此本

尊をこゝに遷し、享保年中新清水寺となる。堂前の基より遙に眺

むれば、西南の遠山、蒼海の波頭真妙にして、京師の音羽の瀧津

瀬にも劣ざる風色なり。

有栖清水 〔石階の下にあり〕。

大悲水 〔舞台の南にあり。御供水ともいふ。〕（後略）

『浪花の賑ひ』 二編

新清水寺

〔乾の社の南西に有、有栖山といふ〕。本尊十一面千手

観音は聖徳太子の御作にして洛東音羽山清水寺より此尊像をこゝに

遷し奉る故に新清水寺と号す。初は有栖川寺と号して延海阿闍梨

の開基なり。北の石階の下に有栖の清水といふあり、清泉にして茶

に煮て佳味なりとて雅客しばくこれを賞す。

新清水

当寺は天王寺の西にあり、堂前の舞台より遙に西南の遠山滄海の光

景真妙なり。且此一両年以來境内の巽の方に水條を通じ新に滝を

作り岩をつみ樹木を植て正しく往古よりあるが如し。堂の傍なる

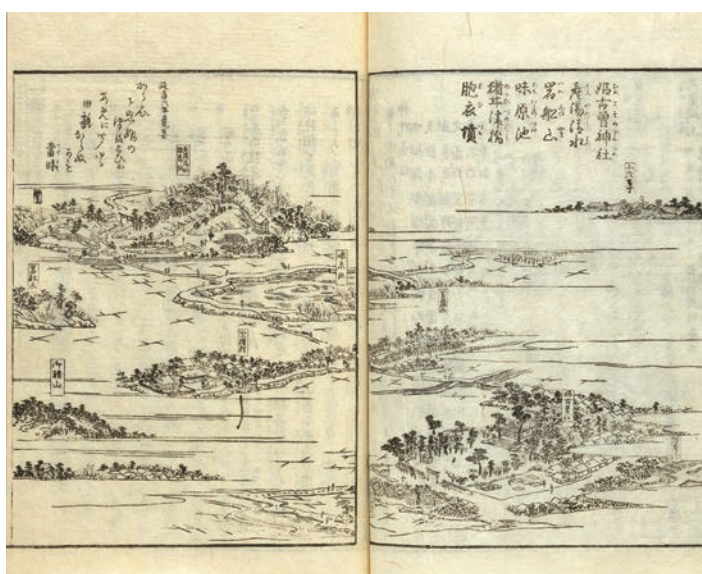
石階の辺には楓の木を多く植て紅葉坂と号す。既に音羽の滝成就な

ればやがて桜をも植ならべて地主の花見も出来るなるべし。

50 浪花百景

産湯味原池【うぶゆあじはらいけ】

芳雪画



『摂津名所図会』 卷之3 姫古曾神社 産湯清水
岩船山 味原池 猪井津橋 胞衣墳

『撰津名所図会』 卷之三

味原地^{あぢはらのいけ} 「小橋村の西にあり。一名、比売古曾神^{ひめこそしん}の御影池^{みかげいけ}といふ。

土人溜池^{ためいけ}とよふ」。

夫木^{つまき}
今朝よりはみはらの池に氷ゐて

あしの村鳥ひまもとむ也 俊 頼

『浪花の賑ひ』 初編

味原地^{あぢはらのいけ} 「小橋村の西にあり」。一名比売古曾神^{ひめこそしん}の御影池^{みかげいけ}とい

ふ。古歌^{こか}には味原^{みはら}の池^{いけ}味原^{みはら}の堤^{つゝみ}など詠^{よみ}たり味原御牧^{あぢはらのみまき} 延喜式

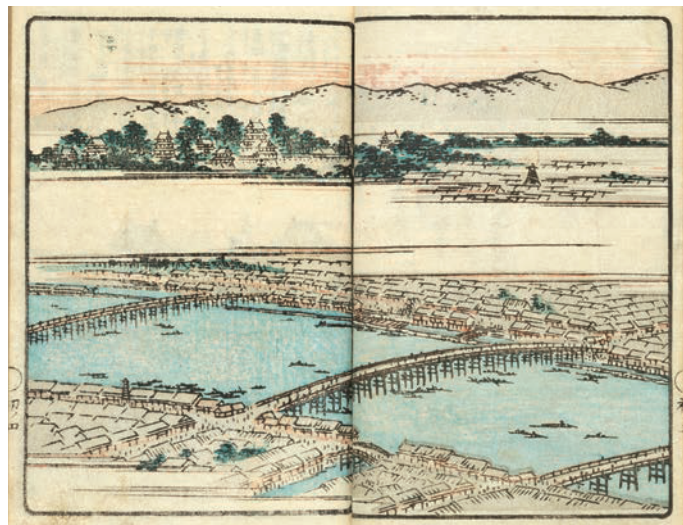
に出。

51 浪花百景 筋鐘御門

【すじがねごもん】

国員画

52 浪花百景三大橋 〔さんだいきょう〕 国員画



『浪華の賑ひ』初編（浪華三大橋）

53 浪花百景 天満ばし風景【てんまばしふうけい】 国員画

『浪花の賑ひ』 初編

天満橋 てんまばし 御宮の西の傍の南にあり。天神橋の

上也、高欄壯観なり。

淀の大川筋又 鯉川 よどをかはすじ なまづがは、古大和川 ふるやまとがは、平野川 ひらのがは、

猫間川等合流して此に落合ふ橋長さ百十五間 ねこまがはとうかうりう ここをちあはしのなが

五尺と云、往古此南の岸の傍辺を大江の岸と いにしへこのみなみ きし はとり をはる きし

いひ当橋と天神橋の間に橋を架して大江の橋 たうきやう てんじんばし あいだ わた おはる はし

といひ或は渡辺の橋とも号す、もつとも其時 あるひ わたなべ かう そのとき

は川幅広くして式百六十間余ありしとぞ。 かははひろ けんよ

54 浪花百景 あみ嶋風景【あみじまふうけい】

国員画

『浪花の賑ひ』 初編

網嶋 あみじま 「京橋の北備前じま橋の北詰東にあり」。此地は淀川の堤にして漁家烈り常に軒端に網を干ゆへ斯は号け初しなるべし。前には淀川の流れ潔く難波津の通船。釣船、網舟。遊興の屋形船など往来ふ眺よく東には生駒嶺が嶺。志貴、葛城。二上嶽等見へわたりて四時ともに絶景なり。故に富家の別宅雅人の閑居。風流の貨食家等ありて頗る遊樂の雅地といふべし。

『撰津名所図会』 卷之三

網嶋 あみしま 「京橋の北にあり」。此所は澱川の堤にして、漁家列り鮮魚を多く市に出す。又貨食家ありて、風流の第を設け、前には難波律の通船・釣船・網船の逍遙に夏の暑を忘る。夕暮の河風に螢瓢瓢として吹とも消す、星の流るゝに似たり。又中秋の月は、銀色三千界のけしきありて、流光に棹の音蕭條としてさら也。東は志貴・生駒・掠が嶺・かづらき・二子山の雪けしきも一興にして、難波最上の名境なるへし。

55 浪花百景 川崎御宮〔かわさきおんみや〕

国員画

『浪花の賑ひ』 初編

川崎御宮 かわさきのをんみや 〔天満川崎にあり。天満ばし筋

の東傍也〕。国花集 こくくわしうにいほくげん 云元和年中松平下総守

匡清侯創建し給ひ ただきよこうさうけん 三江和尚寺務し さんかうをせうじむ 建国寺と号

す、ぜんしうらくやうけん 禅宗洛陽建仁寺に属すと云々、御例祭四

月十七日此日雜人の参詣を許し給ふ、御本殿 このひざうにん

の壮嚴結構は申も恐れあり、御境内に観音 しやうこんけつこう

堂、薬師堂、能舞台あり、社頭には桜樹数株 やくしだう

ありて花の頃は殊更に美観なり。 はな

『摂津名所図会』 卷之四上

川崎御宮 かはさきおんみや 〔天満川崎にあり。国花集云、元和年中松平下総守匡清侯創建し給

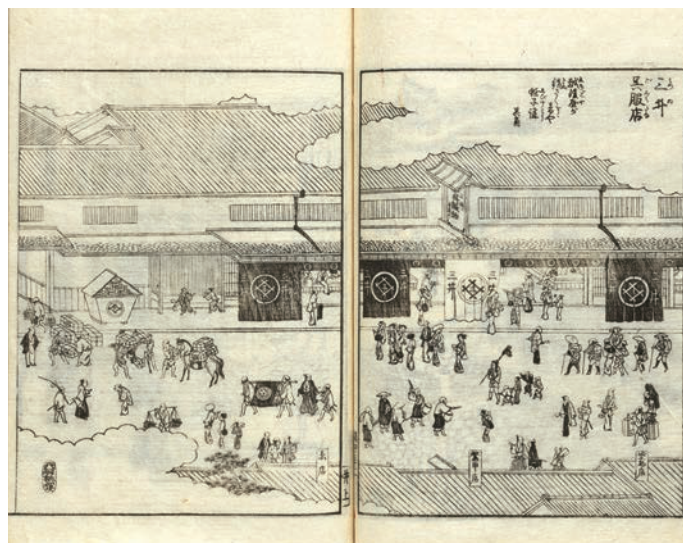
ひ、三江和尚寺務し、さんこう 九昌院建国寺と号し、京師建仁寺に属すと云云。御例

祭四月十七日、此日雜人の参詣を許し給ふ。御境内に観音堂・薬師堂・能舞台 きやうしやうおんけんこくじ

あり。都て社頭桜花多くして弥生 すべ の美艷嬋娟たり〕。

56 浪花百景 三井呉服店〔みついでんふくてん〕

国員画



『摂津名所図会』 卷之 4 上 三井呉服店

57 浪花百景 浜村鬼子母神【はまむらきしぼじん】 国貞画



『浪華の賑ひ』3編 鬼子母神

『浪花の賑ひ』 三編

鬼子母神

此地は浜村にして源光寺の辺りなり。靈驗あらたなりとて遠近より歩みをはこぶ人間断なく、宝前の供物献燈香花の甚しきは言ふも更なり、詣人むれて題目自我偈方便品など唱ふる声最かしがまし。さる程に参詣の道すじには爽なる茶店貨食家建つ、なりて信者の支度遊参の休息を饗応す。別て例月八日群集して賑わし、所謂浪花北方の流行神といふべし。

58 浪花百景 北瓢亭【きたのひょうてい】 国員画

59 浪花百景 宗禅寺場々【そうぜんじばば】 国員画

『摂津名所図会』 卷之三

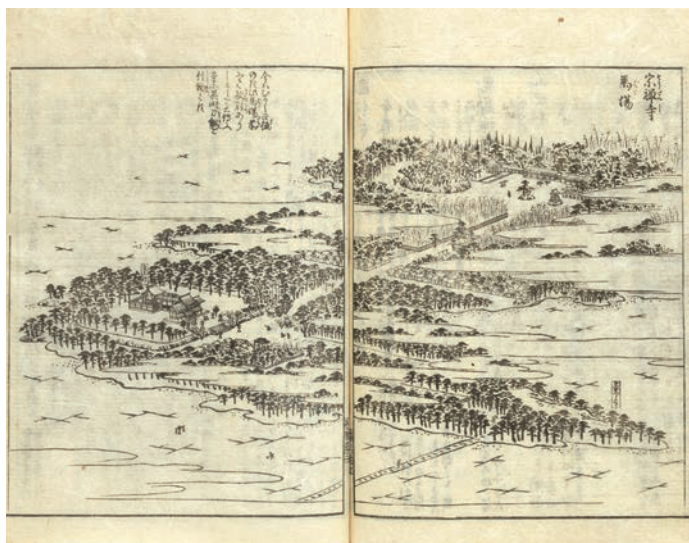
宗禅寺馬場 そうぜんじばば 今いまはむかし正徳とくの頃、此馬場こばば前まへにて敵討かたきうちありしよしを云伝いふ。寺てらに其時そのとき刀剣とうけんを什物じゅうもつとす。

崇禅寺 そうぜんじ〔北中嶋きたなかつしまにあり。禅宗曹洞ぜんそうそうとう（中略）当寺開基たうてらは徳叟とくそう亨隣けうりん和尚おしょう。足利六代將軍義教あしかが公こう御菩提所ごぼだいしよとして細川左馬頭はなわさだま

持賢ちけん、嘉吉二年の建立也。又、將軍義政よしまさ公の御袖印ごそでいんを賜ふ〕。

義士墳きしのつか〔遠城治左衛門重広・安藤喜八郎光乗の二人、舎弟達城重次の敵に出合、こゝにて返り討に討れし墳墓ふんぼなり〕。

（後略）



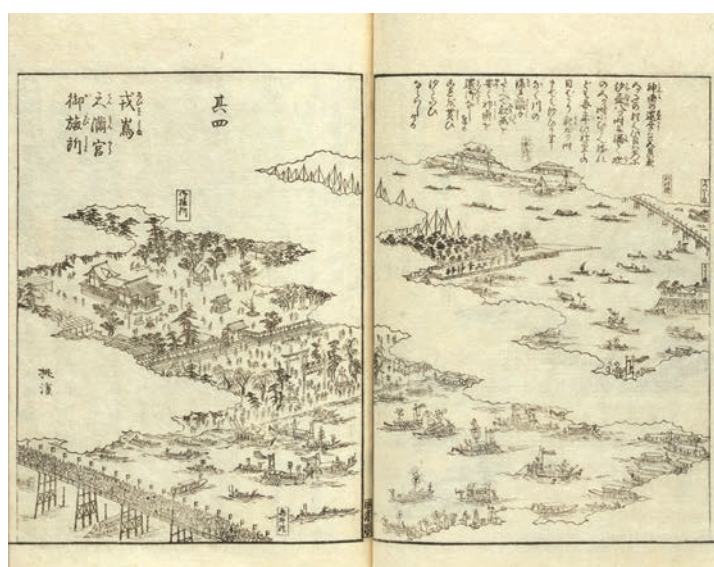
『摂津名所図会』 卷之三 宗禅寺馬場

60 浪花百景 玉江橋景
【たまえばしけい】
国員画

61 浪花百景

戎嶋天満宮御旅所「えびすじまてんまんぐうおたびしよ」

国員画



『摂津名所図会』 卷之 4 上 其四 戎嶋天満宮御旅所

『摂津名所図会』 卷之四上

其四 戎嶋えびすしま天満宮御旅所てんまんくうおたびしよ

神輿しんよの還幸くわんかうは廿五日の夜五ツ過の頃也。此日は、常に汐昼しほひる八ツ時に満みちて

晩ばんの五ツ時にひる也。然れども、毎年此神事の日ばかり夜九ツ時までも

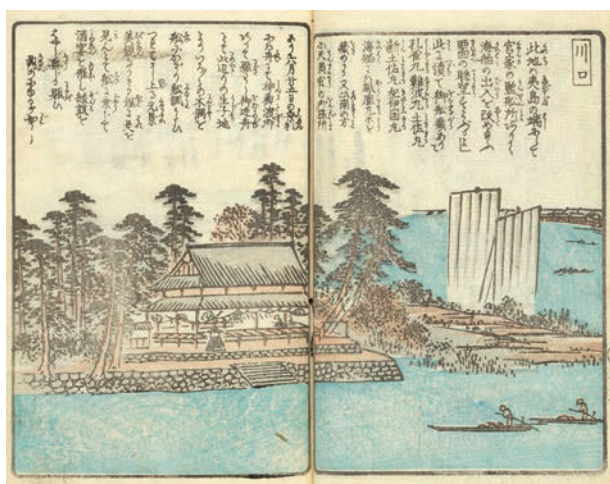
汐しほひる事なく、川の流ながれ滔々たうくとた、へて船路ふなぢを安やすく神輿みこしを還御くわんぎよなし奉る。

これを貫もろひ汐といひならはしける。

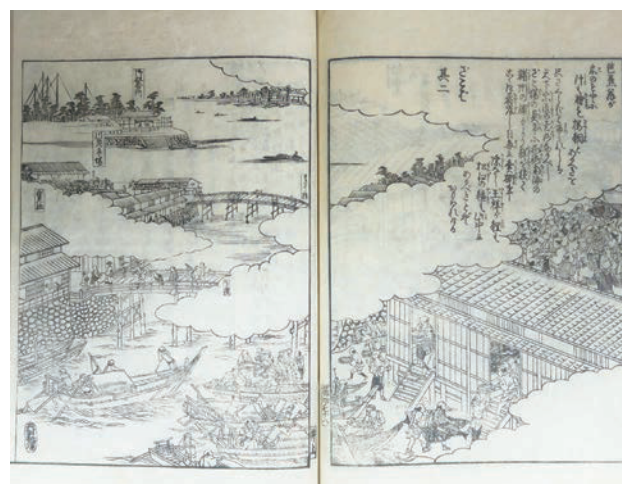
62 浪花百景

川口雑候場つきじ「かわぐちざこばつきじ」

芳瀧画



『浪華の賑ひ』3編 川口



『摂津名所図会』巻之4下 ざこば其二

『撰津名所図会』 卷之四下

河口 河海の喉口にして両所あり。一は安治川といふ。大川筋・土佐堀・蜷川等の下流なり。一は木津川といふ。長堀・道頓堀及び西の方諸流こゝに帰会す。諸国の廻船こゝにつどひて碇石を卸し、これより行李船・三枚船を以て五穀雜貨を問屋へ運送す。千石二千石の大船水上に町に路を作りたる如く、桅竿は北斗を指し上下は欄絞をもつて自在し、鵠首には船の名・家々の紋付て其国々をしらせ、風威の順不順・潮時の満干を考て出帆あり着船あり、両河口共に官家の監船所ありて海船の出入を改らる。抑初春の乗初より晩船の甲乙あるは新艘の船おろしの祝ひまでもみな両河口の賑ひ也。其連船の中を尖頭舟漕つれく酒肴麵類野菜の物までも売ありく、其声喧し。又其船に遊女・土妓を乗せて三弦おかしく弾せ何やら声を発て喚あり。これを土俗伽遺船といふ。むかしの川末の江口也。難波津大湊となれるは此河口の泊船の連なるにてしらるべし。

『浪花の賑ひ』 三編

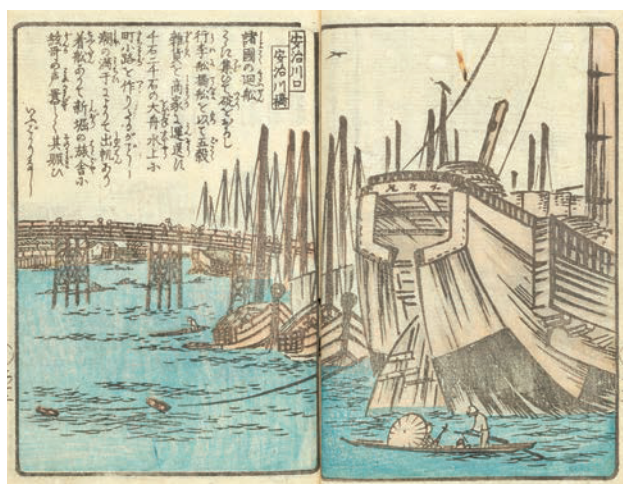
川口

此地は夷島の端にして官家の監船所ありて海船の出入を改め給ふ。西面の眺望すこぶるよし。此に続て御船蔵ありて孔雀丸・難波丸・土佐丸・新土佐丸・紀伊国丸・海船には鳳凰丸等を蔵めらる。又此南の方に天満宮の御旅所あり、六月廿五日の祭礼には舟にて神輿渡御ありて賑わし、御迎舟とて此辺りの生子地よりいろくの木偶を船にかざり、船諷うたひつれてさし上る光景美観なり。さる程に是を見んとて船に乗じて酒宴を催し絃鼓をはやし興じる賑ひ鼎のにゆるが如し。

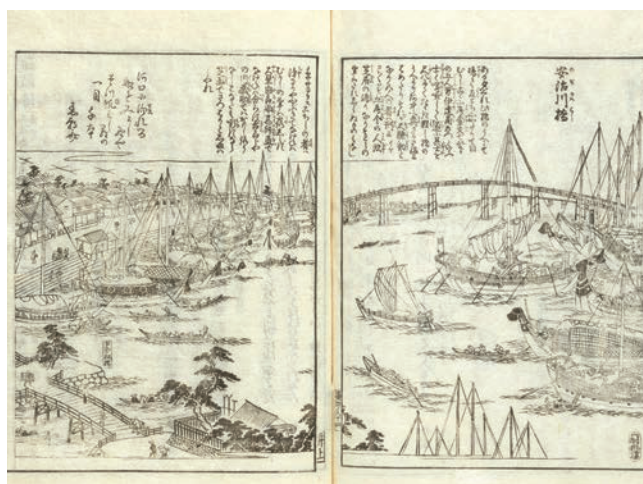
63 浪花百景

安治川ばし「あじかわばし」

国員画



『浪華の賑ひ』3編 安治川口 安治川橋



『撰津名所図会』巻之4下 安治川橋

『摂津名所図会』 卷之四下

安治川 あぢかは 「大川筋の末をいふ。貞享年中川村瑞見安治と

いふ人水道の地理に鍛錬し此川筋を堀たり。因茲安治

を音に呼て安治川といふ。洪水の時逆流止つて戎嶋・

衢壤島・市岡新田・泉尾新田等の田園大いに壁て民庶

安堵す。公務への勲功と謂つべし」。

『浪花の賑ひ』 三編

安治川口 安治川橋

諸国の廻船こゝに集ひて碇をおろし行李船橋船を以て五穀雜貨を商家に

運送す。千石二千石の大舟水上に町小路と作りたるがごとし。潮の満干

によりて出帆あり、着船ありて新堀の旅舎に絃哥の声囂しく其賑ひ

ふばかりなし。

64 浪花百景

下安治川随見山【しもあじかわずいけんやま】

芳雪画

『撰津名所図会』 卷之四下

瑞見山ずいけんやま 「安治川あじの末にあり。瑞賢ずいけん此川すち條ほりを堀ほりし時、土砂どしやをこゝに上げしめ、川口を助く。故に名によぶ、本名波除山なみよけといふ。洪水くわうすいの時高濤たかなみをこゝにて堰除ふさぎよるよりの名なるべし」。

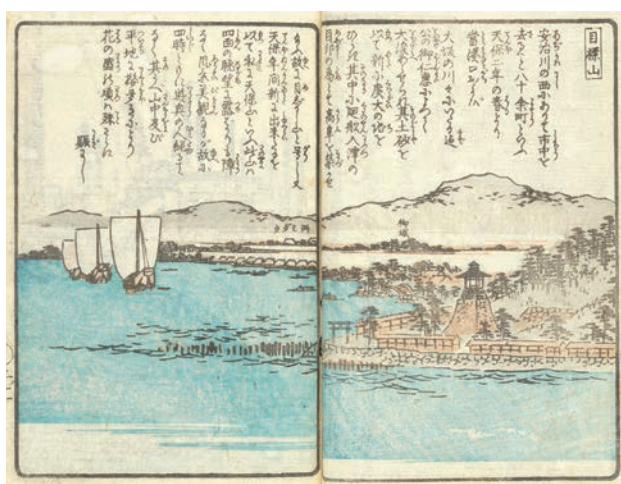
『浪花の賑ひ』 三編

波除山なみよけやま 「南安治川ちやうきやうねんかんの末にあり」。貞享年間あぢかわ、安治川あぢかわすじを新鑿しんさくありし時とき、土砂どしやをこゝに上げあげしめ、川口かはぐちを助たすく、俗ぞくに瑞見山ずいけんやまといふ、洪水くわうすいの時とき、高濤たかなみをこゝにて堰ふせぎ除よけるよりの名ななるべし。然しかるに後年かうねん、漸しだいに新田しんでんを築つきて、今は田圃いまだの中でんほとなりて、波除なみよけの名なも似につかわしからずなりぬ。此傍このほとりに茨住吉いばらすみよしの御旅所をたびしよあり、六月晦日しんよとぎよには神輿しんよ渡御とぎよありて賑にぎはわし。

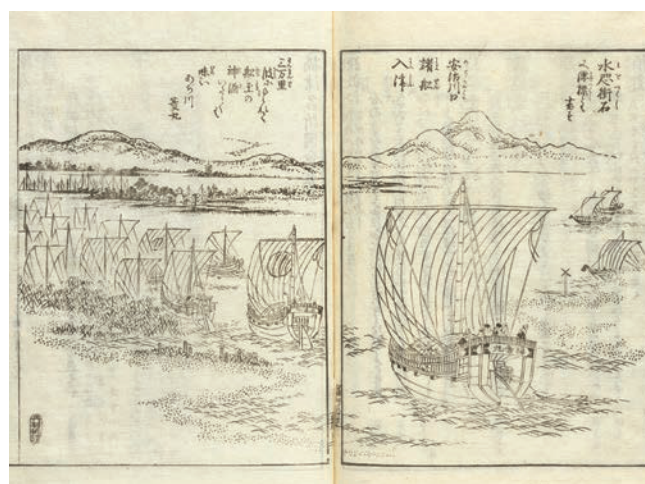
65 浪花百景

天保山「てんぽうざん」

芳雪画



『浪華の賑ひ』3編 目標山



『摂津名所図会』巻之4下 水尻衝石又濡標
とも書す

『摂津名所図会』 卷之四下

水咫衝石 みをつくし 一之洲 のす にあり。今いふ水尾木 みおき なるべし。此修理科 しゆりりやう、廻船問屋 くわいせんとひや・船持 ふなもち

仲間の課役 なかま くわやく たり。(後略)

『浪花の賑ひ』 三編

目標山

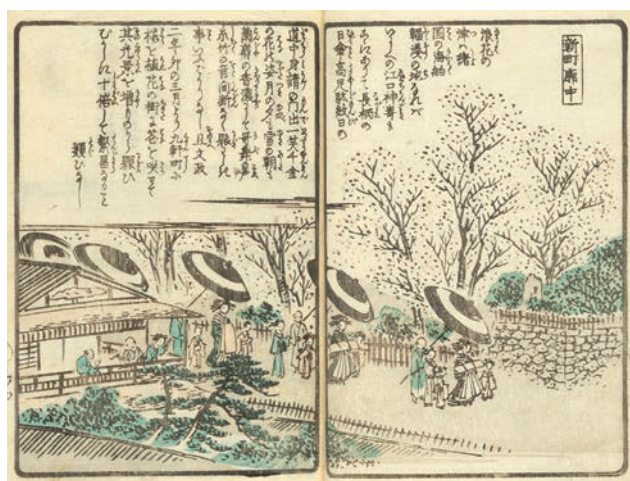
安治川の西 あぢかはにし にありて市中 しちう を去ること八十余町 よてう といふ。天保二年 てんぽ の春 はる より当湊口 たうみなとぐち および大坂の川々にいたる迄 まで、公の御仁恵 こうしんけ によつて大濠 をほ あらせられ、其土砂 そのどしや を以て新に広大の地 あらたくわうだい をひらき、其中 そのなか に廻船入津 くわいせんにうつ の目印 めじるし の為 ため とて高阜 かうふ を築 きづ かせ給ふ、故 ゆへ に目じるし山 がう と号 がう し、又天保年間 てんぽねんかん 新に出来 あらたし たるを以 もつ て私に天保山 このやま といふ。此山 しめん は四面 ながめ の眺望 つゆ に露 つゆ ばかりも障 さわり なく、風景 ふうけい 美観 びくわん なるが故 ゆへ に四時 しじ ともに遊興 いうけう の人絶 なめ ることなく、其 その うへ山中 さんちう 及び平地 へいち に桜多 さくらをほ きにより花 はな の盛 さか りは殊 こと さらに賑 にぎ わし。

66 浪花百景

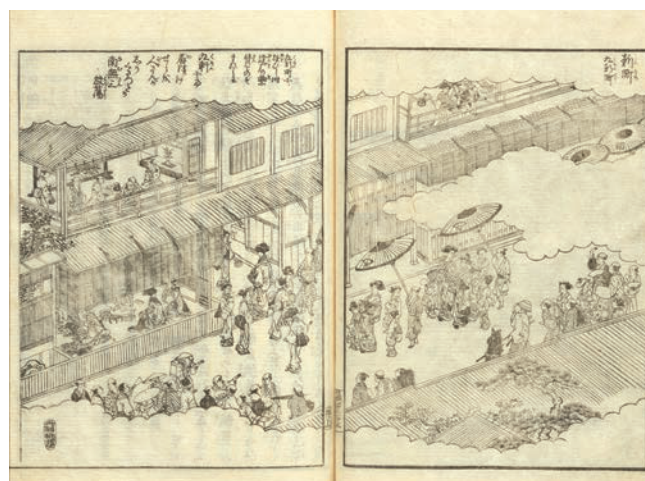
新町廓中九軒夜桜

〔しんまちかくちゅうくけんよざくら〕

芳瀧画



『浪華の賑ひ』3編 新町廓中



『摂津名所図会』巻之4下 新町九軒町

『浪華の賑ひ』 三編

新町廓 しんまちのくわらは 「新町橋の西にあり」。寛永年中 くわんえいねんちゆう はじめて此に廓を許され、田圃 でんほ を開きて新に町となせし故世 こへよ の人斯 ひとかく はなづけ初柳泊 そめくるは の惣名 そうみやう とはなれり、尤 もつとも 其頃 そのころ は浪花三郷 らうくわさんかう の西 にし の端 はし にて是より西 にし は田圃 でんほ なりしが、後世 こうせい 漸 しだい に土地 とち はびこり今は市中 いましちゆう の正中 ただなか とはなれり、浪花 なには の繁榮 はんえい 古今 ここん の沿革 えんかく にて知るべし。凡 すべ て四丁四方 してうよほう の花街 くるは にして青楼 せいろう 何れも善尽 ぜんつく し美尽 びつく して花麗 くわれい なること言ばかりなし。就中 なかんづく 九軒町 けんちゆう の吉田屋 よしだや 佐渡嶋町 さどしまてう の高嶋屋 たかしまや を魁 くわい とす。又通條 とふりすじ の青楼 ちやや 多かる中に、折屋 をりや は別 わけ て宴席 えんせき および庭 には の林泉 りんせん、万 よろづ の調度料理 てうどりようりむき 向 いたる に至 いたる まで他 た に超 こへ たれば遊客 いうかくしやう 賞 いふ せずと言 いふ ことなし。

新町廓中

浪花 なには の津 つ は諸国 しよこく の海船輻湊 かいふくぷそう の地 ち なれば、いしくの江口神崎 えぐちかんざき もこゝにありて長柄 ながえ の日傘 ひがさ 高足駄紋 たかあしだもんび 日の道 ひのみち 中身 なうちんみ 請 もんで の門出 もんいで、一笑千金 いつせうせんぎん の花 はな の姿月 すがたつき の夕 ゆふべ も雪 ゆき の朝 あした も蘭麝 らんじや の香濃 かほりこまやか にして、歌舞 かぶ の声糸竹 こゑしちく の音間断 おとかんだん なく賑 にぎは わしき事 こと いふばかりなし。且 そのつへ 文政二年卯 ぶんせいにえんう の三月 そのつへ より九軒町 くけんちゆう に桜 さくら を植花 うゑはな の街 ちまた に花 はな を咲 さか せて、其光景 そのくわうけい を増 ます ものから賑 にぎは ひむかしに十倍 じうばい して繁昌 はんじやう なること類 たぐ ひなし。

※『撰津名所図会』の記載は、「12 新町店つき」(二二九ページ) 参照

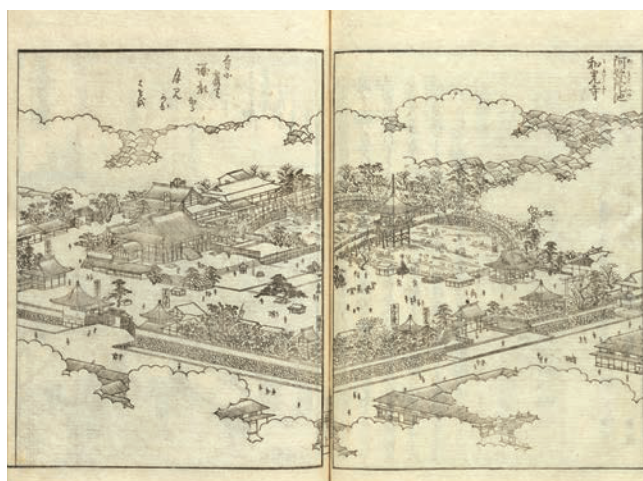
67 浪花百景

あみだ池 〔あみだいけ〕

芳瀧画



『浪華の賑ひ』3編 阿弥陀池



『撰津名所図会』巻之4下 阿弥陀池 和光寺

『撰津名所図会』 卷之四下

蓮地山和光寺 れんちさんわくわうじ 「北堀江御地通にあり。智善院と号す。信州善光寺より数代住職す」。〔中略〕

阿弥陀池 あみだいけ 「本堂の北にあり。池中に宝塔あり。弥陀三尊を安置す。額は放光閣と書す。池の面に

は蓮多し。盛には香四方に薫る」。〔中略〕

夫当寺の阿弥陀池は、むかし欽明天皇の御時百済国より仏像経巻を渡す。帝これを尊信ある事大方

ならず。然るに物部守屋大連・尾輿中臣連等奏して曰、我国は神国也。蕃神を拝し給ふ事は天津

国津神の御怒あらん。其上此頃疫疾流行て国民大に悲しむ。早く追放ち候べしとて、有司に仰て

寺塔を斫倒しあるひは火を放て仏像を焼喪す事多し。其中に弥陀三尊火に焦ず、斫ども摧す。遂

に難波堀江に棄しむ。〔以上日本紀大意〕。其後、本多善光といふ者此所を過るに仏告あれば、尊像

を肩にして信州へ帰る。今の善光寺これなり。其古跡なればとて、元禄十一年智善上人此地を闢き

善光寺同体の本尊を安置し、むかしよりの常灯を照らして難波の精舎となしぬ。遠近尊信して常に

詣人間断なし。境内には市店軒端を連ね門前の芝居賑しく、世の人寺号を唱ずして阿弥陀池との

みいふは此聖蹟を賞するの謂ならんや。〔後略〕

『浪華の賑ひ』 三編

阿弥陀池

此地は北堀江御地通にして蓮池山

和光寺と号す。善光寺の如来出

現の地なりとて、元禄十一年智善

上人開基にて善光寺同体の本尊

を安置し、常灯を照し浪花の精舎

となしぬ。宝塔には放光閣の額

を掲ぐ。世人寺号を唱へずして

たゞ阿弥陀池と称するは、此聖

跡を賞する謂ならんか。境内に

堂舎多く且市店此彼にありて、詣

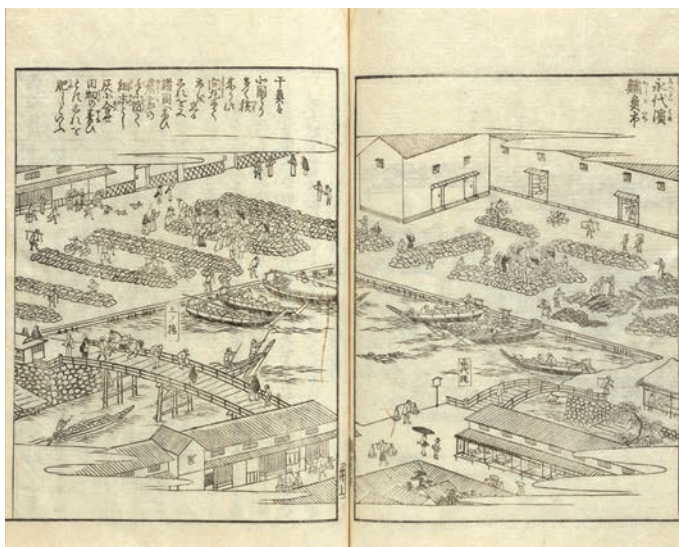
人平日に絶ることなく頗る繁昌な

り。

68 浪花百景

永代浜「えいたいはま」

芳瀧画



『摂津名所図会』 卷之4下 永代浜鱈魚市

『摂津名所図会』 卷之四下

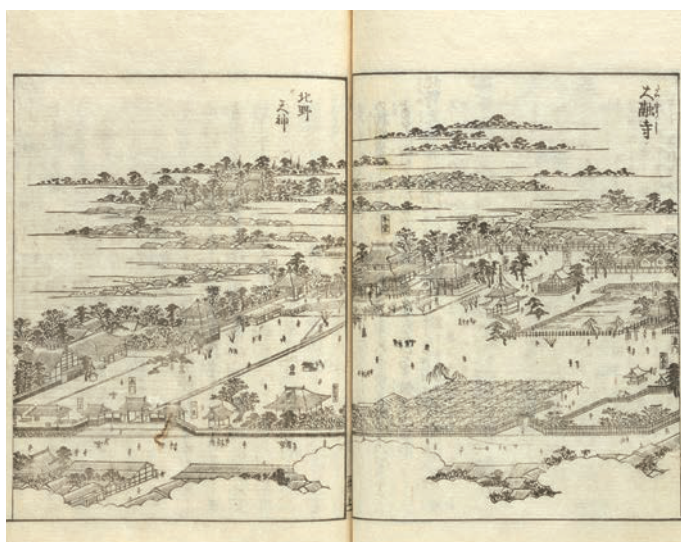
えいたいはまはしかいち
永代浜鱸魚市

干魚は北国より多く積来り、此問丸にて市を立る。これを又諸国へ商ひ
農家の手に渡で、細末とし灰に合せ、田畑の養ひとす。これを肥しとい
ふ。

69 浪花百景

北之大融寺【きたのたいゆうじ】

国員画



『摂津名所図会』 卷之4 上 大融寺

『撰津名所図会』 卷之四上

桂木山大融寺 〔北野にあり。古義真言宗。高野四善庵に属す。〕（中略）

それ当寺は難波の古寺にして、開基は弘法大師也。弘仁年中大師こゝに来る時、松柏深生茂り、木下闇の暗に、靈光赫々として異香芳しき靈樹あり。即大師これを伐て自地蔵・毘沙門の二軀を刻み、仏院を草創し給ふ。其頃 嵯峨天皇これを観感ありて、大悲の尊容を寄附し給ふ。即これを本尊とし、同帝の皇子 源 融公六条河原院を建て、陸奥千質浦の塩竈を摸し、難波の御津の浦より日毎に潮を汲せ御遊ある。其頃こゝに遊歴し給ひて、仁海上人に遺命し仏院を建営し、かの靈樹の地なるゆへ、桂木山と号し、融公の諱を以て大融寺と称す。又其頃弘法大師真言の靈場とし給ふ。星移物換りて、逆乱の為に諸堂荒廢して、大門の跡はこれより西北三町にあり。今字となる。其外宝塔、樓閣の蹟はみな田園の字にあり。浴室の跡は今風呂小路とて耕作の地なり。後世快済上人来て今の如く再興し、むかしにかへりて春は堂前の藤波麗しく咲乱れて、詣人の眺となりて賑しき靈刹也。此地名を床の尾といふは免餓野の訛なるべし。（後略）

『浪華の賑ひ』 三編

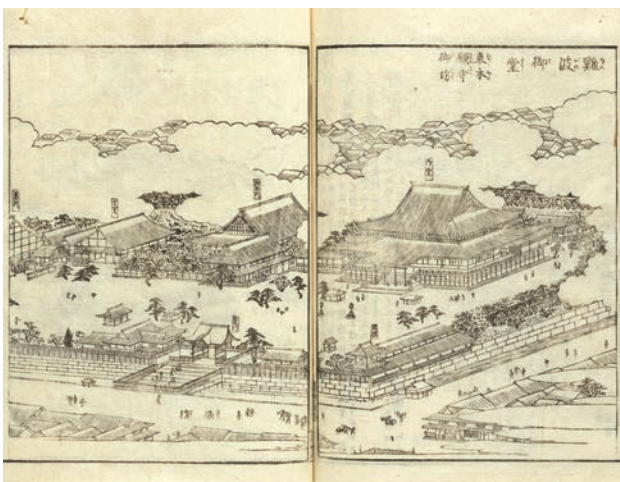
大融寺 〔北野にあり。〕 佳木山と号す、本

尊千手觀世音にして春日の作といふ、源融 大臣の建立なるにより大融寺と号す、開基弘法大師なりとぞ。境内に諸堂巍々とし什宝も又許多ありて名におふ浪花の古寺といふべし。堂前には藤の棚の茶店などありて花の頃麗しく且愛染堂、庚申堂ありて縁日には群参ありて賑わし。

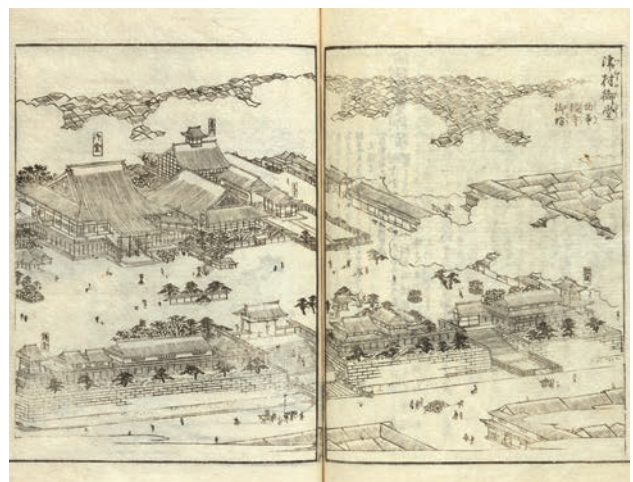
70 浪花百景

両本願寺【りょうほんがんじ】

国員画



『摂津名所図会』 卷之 4 上 難波御堂



『摂津名所図会』 卷之 4 上 津村御堂

『摂津名所図会』 卷之四上

津村御堂^{つむらみだう}〔御堂筋本町の北にあり。表御堂^{おもてみだう}、又北御堂ともいふ。京師西本願寺抱所なり。津村は円^{つむら}の訛^{つふらよこまり}なるへし〕。(中略)

本願寺第八代蓮如上人、明応四年石山本願寺を建立し給ひ、化益^{けやく}し給ふゆへ、大坂市中及ひ北摂津の村里の門徒^{もんと}多く尊信^{そんしん}す。因之^{これによつて}、第十二代准如上人此御堂^{みだう}を再興し給ふ。初めは境内狭少^{せう}なれば、元禄年中裏町渡辺筋六十間、安土町四十間を買取て境内とす。又享保九年三月大坂大火に類焼す。其後、南の方本町條^{すち}の人家^{じんか}を転^{てん}して寺内とし、今の如く御堂の莊嚴他境に勝れ美麗也。画は多く法橋狩野永雪とそ聞へし。常に参詣の老若間断^{かんだん}なし。毎年七月十七日より十九日まで、京師本山より灯笼を移して御堂^{みだう}に於て門徒に見せしむ。是恒例也。築地の内の巡りには講中の詰所^{つめしょ}建ならひ、築地の外には近年作り松を多く植て、景勝として市中第一の仏閣也。(後略)

難波御堂^{なんばのみだう}〔御堂條久太郎町にあり。裏御堂^{うらみだう}、又南御堂とも称す。京師東本願寺の抱所なり〕。(中略)

中興第十二代教如上人、將軍家より台命を蒙りて此地を賜り、難波御坊と称す。初め文禄年中には道修町壺町目にありて、渡辺御坊といひしと也。慶長の末に此地に御堂を移され、南北両御堂とも莊嚴艷麗^{しょうこんえんれい}にして他に比類^{ひるい}あらず。築垣^{ついで}の石高くして西北の方は土堰^{どて}を築き、上に映山紅山躑躅^{きりしまさつき}を多く植て、盛^{さかり}には花色爛漫^{くはしよくらんまん}として往来の袂^{ゆき}を輝^{たもとか}し、市中^{しちう}の壯觀^{そつくわん}なるべし。(後略)

71 浪花百景 大江ばしより鍋しま風景

【おおえばしよりなべしまふうけい】 国員画

『撰津名所図会』 卷之四上

大江橋 おほえはし 〔一名渡邊橋 わたなべはし。近江川 あふみ の下流 かりう、今の天満橋・天神橋 あひた の間に架す わた。此時河幅 かははた 式百六十間余、今川幅 かははた 狭く成つて三橋 さんけう を袈 わた す。一に天満橋 てんまばし、長さ百十五間五尺。二に天神橋 てんしん、長さ百廿二間三尺。三に難波橋 なにわはし、長さ百十四間六尺。是を浪花 なには 三大橋 さんおほはし といふ。今の堂嶋 だうしま の大江橋・渡辺橋 ことう は後世堂嶋 きつ を築く時、貞享 ちやうきやう 年中にかくる也。旧名 きうみやう によつて号 なづ く。〕（後略）

72 浪花百景 二軒茶や風景【にけんぢややふうけい】 国貞画

『浪華の賑ひ』 初編

二軒茶屋

此地は玉造の街端にして伊勢参宮大和巡り大峯詣等の送別の場所なるゆへ、左右に酒肴をひさぐ茶店あり、故に斯は号けしなり。さる程に弥生の初旬より難波萱笠一様にうたひ連たる伊勢をん頭、しばし別れの酒宴に酔て出るあり這入あり、或は軒端に休むもありて賑わしきこと言ばかりなし。其上平日といへども奈良街道の往還なれば旅人の通行絶る間なく或は信貴山の毘沙門生駒の聖天等は月参の信者ありて皆この茶店を休足所と定む。



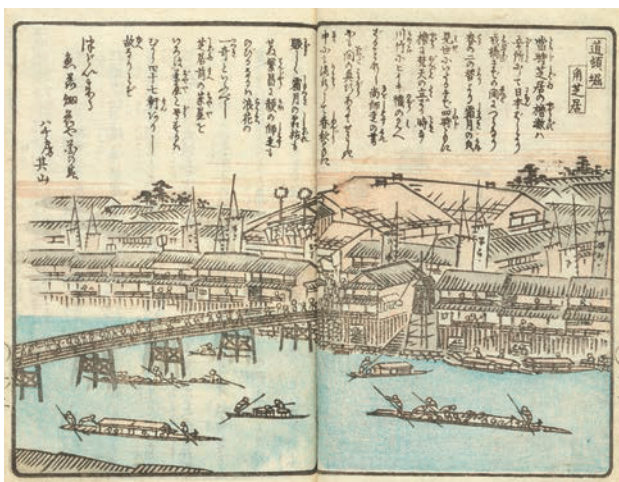
『浪華の賑ひ』 初編 二軒茶屋

73 浪花百景

道頓堀角芝居

国員画

「どうとんぼりかどのしばい」



『浪華の賑ひ』2編 道頓堀角芝居



『摂津名所図会』巻之4下 道頓堀芝居側

『摂津名所図会』 卷之四下

道頓堀たうとんぼり〔大坂の南極なんきよくなり。東横堀よこより流ながれて日吉橋ひよしはしの西にしにて木津川きつがわに入り海に会くわいす〕。(中略) 道頓堀嶋之内だうとんぼりしまの夕気色けしきは都みやこに劣せうらぬ、難波女なにはめの色白いろしろく清きよらかに出立て錦繡きんしゅうをまとひ珠たまの髪指かんざし露つゆちるばかり、女伶げいこあり、男娼やらうあり、送おくるあり、迎むかひあり。芝居側しばいがはの囁ささしきは四時ししいしたへまなし。まづ初春はつはるの十日とを蛭子えびすより梅匂うめのかほひ初花はつはなひらく頃天王寺しやうてんやうじの聖霊会しやうりやうゑ、彼岸参ひがみまいり、寺社かいぢやうの開帳すみよし、住吉しほの汐干さつき、五月さつきの御田植おだうゑ、みな月の夏祭なつまつり、船遊びふなあその花火はなび、難波なんはの夕涼ゆふすみ、名月めいけつ、後の月のちつき、鯨魚はぜつり、蛭まてとり、十夜講じふやかう、蛭子講えびすかう、雪ゆきの曙あけぼのに夜よるの顔見世かほみせあるは月毎ことの大師巡めぐり、宵薬師やくし、宵庚申よひかうしん、勧進能くわんしんのう、大相撲おほすもふまでみな此里さとの賑にぎはひにして、下風たいこの声色こはいろ法師ほふしの琴きんの音常ねつねにして、難波江なにはえの流絶なれたずしてもとの流ながれにあらず。其流そのながれの身みのしばし止とどりて堰いせきに花はなの散ちりかゝる倅おちかけなるへし。

『浪華の賑ひ』 二編

道頓堀角芝居

当時たうじ芝居しばゐの櫓数やぐらかずは五ヶ所ごかしよにして日本にほんばしより戎橋えびすばしまでの間あいだにつらなり、春はるの二ふたの替かはりより霜月しもつきの顔見世かほみせにいたるまで四時ししいじともに櫓やぐらに梵天ぼんてんの立たざる時ときなし、川竹かわたけにヒイキ幟のぼりの見みへざることなし。尚師走なをしはすの暮くれにも間あいだの興こう行ぎやうありてせわしき中なかにも流行りやうかうして、春秋しゆんじうともに賑にぎわしく霜月しもつきの霜枯しもがれもせぬ繁昌はんじやうに顔かほの師走しはすものびるなるは浪花らうくはの一奇いっきといふべし。芝居前しばあまへの茶屋ちややをいろは茶屋ぢややと号ごうするはむかし四十七軒けんありし故ゆへなりとぞ。

※「38 道頓堀太郎左衛門橋雨中」(二六九ページ)も参照

74 浪花百景 長町裏遠見難波蔵 〔ながまちうらとおみなんばくら〕 芳瀧画

『摂津名所図会』 卷之二

名呉町の「今の長町」名物として、あたい いや 価の賤しきかつかさ 傘を多く張て諸国へ商ふ。晴天にあまたならべ干しける時、魔風吹来り、傘空へ舞上るをとらんとして柄を強く持ければ、其人も遂に吹飛され、柄を放さば地へ落んとて放さざりければ、何国ともしらぬ国へ落にけり。其国の王府より船にて日本へ送り帰されしと、ある人のかたりき。



『摂津名所図会』 卷之2 (名呉町)

75 浪花百景 吉助牡丹盛り〔きちすけばたんさかり〕 芳雪画

『摂津名所図会』 卷之四下

二井 ふたつゐど 此井水はよきとて此辺の用水とす。其ひかしの方、植木や吉助か前栽には和漢の名木を多く植たり。莊子が八千代の

椿、王晋が三槐も赤梅檀の香木も植持て、諸州へ船にて積送る也。

ニツ井 ふた 〔道頓堀の東、堀留町にあり。清泉にして此辺民家の用水とす〕。



『摂津名所図会』 卷之4下 二井

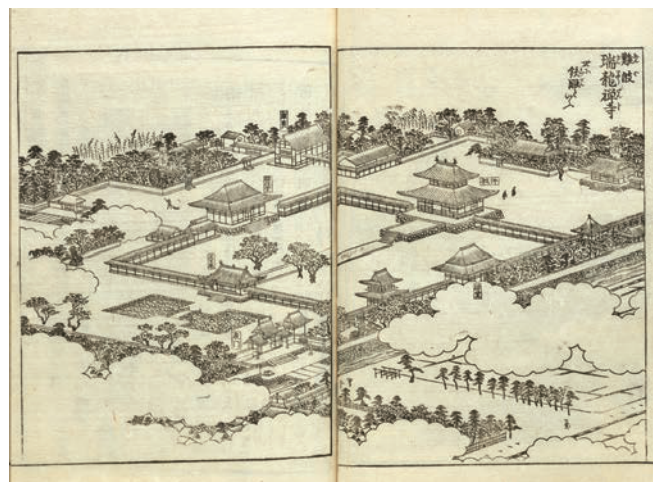
76 浪花百景

鉄眼寺夕景【てつげんじゆうけい】

芳雪画



『浪華の賑ひ』2編 瑞龍寺



『摂津名所図会』巻之3 難波瑞龍禪寺

『摂津名所図会』 卷之三

慈雲山瑞龍禪寺

〔難波村北端にあり。禅宗黄檗派〕。仏殿薬師仏

〔十二神

将を安す〕。天王殿

〔中央弥勒仏、左右四天王、後堂韋駄天〕。禅堂

〔仏殿

の左にあり〕。祠堂

〔禅堂に隣る〕。鎮守

〔祠堂に隣る〕。禅悦堂

〔仏殿

の右にあり〕。(中略)

夫当寺の開基は鉄元和尚也。其初は薬師寺といふて邑支配の寺なりしが、寛文

十年和尚こゝに止住し給ふ。産は肥後国本願寺末下の寺に生れ、既に妻もあり

しが、其宗徒不徳無才の人も寺格により上位に居る事を甘心せず、黄檗山に登

り木庵禅師に従ふ。其妻なる人尋登りしかども対面せざるを、はかりて黄檗の

門前に旅宿して師の出るを窺ふに、ある日果して出たるを強て誘ひければ、止

事をえず伴ひて故国へ帰り其郷まで入しが、ぬけて上途し、又黄檗に至る。

法を嗣した後、延宝四年当山を建立せり。世の人今なを鉄眼をもて此寺を称ず。

(後略)

『浪華の賑ひ』 二編

瑞龍寺

当寺は難波村の北にあり慈雲山と号す。鐵眼和尚の

開基なるがゆへに俗になんばの鉄眼といふ。諸堂の

造立すべて唐山の如くにして菟道の黄檗山に彷彿た

り。最境内広く殊勝なる禅刹なり。諸堂に雪の積

たる風景は正しく吾朝にあらざる思ひせらるるとて、

儒家文人画師など雪中に競ひてこれを賞す。蓮池

の西の傍に俳師淡々翁の墓あり、塚に一石一樹を植

たり。例年四月六日より十五日まで三千佛名普度

会修行ありて詣人群をなす。

77 浪花百景 天王寺増井〔てんのうじますい〕

芳瀧画

『撰津名所図会』 卷之二

増井清水ますみのしみづ

〔清水の下、南の方にあり。七名泉めいせんの其一つなり〕。

78 浪花百景 寿法寺〔じゅほうじ〕 芳瀧画

『浪花の賑ひ』 二編

寿法寺^{じゅほうじ} 天王寺東門の北にあり。当寺内^{たうじない}に糸桜^{いとざくら}の大樹^{たいじゆ}あり、花^{はな}の頃^{ころ}は衆人^{もろびと}群集^{むれつどひ}て遊観^{いうくわん}す。又堂^{だう}の後僧坊^{しりへそうぼう}の庭前^{にはさき}に楓^{かへで}の大樹^{たいじゆ}数株^{すちゆう}ありて紅葉^{こうよふ}の時節^{じせつ}には眩^{まばゆき}がごとし、然^{しか}るに先頃^{さいのころ}よりして此^{この}楓^{かへで}樹下^{のきのした}に石仏^{せきぶつ}を許多^{そくばくたて}建^{たて}られたり、実尊^{げにたうと}くも難有^{ありがた}けれど可惜^{あたらくはうけい}光景^{うしな}を失^みへるは風流^{みやび}の徒^{ともがら}の嘆息^{たんそく}するところなり。

79 浪花百景

舍利寺〔しゃりじ〕

芳瀧画



『摂津名所図会』 卷之3 舍利寺

『撰津名所図会』 卷之三

南岳山舍利寺 なんかくざんしやりし 〔舍利寺村にあり。今禪宗黄檗派 わうはくは。初めの開基聖徳王、中興木庵和尚 もくあん〕。(中略)

夫当山 たうざんは聖徳太子 しやうとくの草創 さうさう也。むかし此里 このちに生野長者 いくのちやうしやといふ者 ものあり。長者 ちやうしやが子 こ、生質 うまれつき啞 おしなりしにより、父母大に悲歎 ひたんし神仏 しんぶつを祈 いのる事 こと浅 あさからず。太子 たいしこれを灰 はいかに聞召 きこしめされ、長者 ちやうしやが子 こをめして宣 のたまふは、予 よが前生 ぜんしやうにて汝 なんぢに毘婆尸 びばしふつ仏 ぶつの舍利三顆 しやりくわを預置 あつけ置きたり。今 いま予 よに返 かへし与 あたへよと命 めいじ給 たまふ。其時 そのとき啞 おしの口 くちより仏舍利三顆 ぶつしやりくわを吐出 はきいたし太子 たいしに奉 ほうりぬ。それより能言 よくものいふ事 ことを得 えたり。太子 すなはち即 くわ二顆 くわの舍利 しやりを天王寺・法隆寺 ほうりうしに藏 おさめ、一顆 くわに自筆 しひつの御影 みえいを副 そへて長者 ちやうしやに附与 ふよし給 たまふ。因茲 これによつて、一字 うの精舎 てらを建立 たてし、舍利寺 しやりしと号 なづす。生野長者 いくのちやうしやが旧棲 きうせきは此 この舍利寺村 しやりしむら也。星霜 せいそう累 かさなりて伽藍 からんも荒廢 くわいはいし、漸 やうやく太子堂 たいしだう一字 う存在 ぞんざいせしか、寛文 くわんぶん年中、将軍家 しやうぐんけより黄檗山木庵和尚 わうはくざいもくあんへ此旧地 このきうちを賜 たまふ。延宝 えんぽう三年、悦山和尚 えつざん今の如 ごとく新 あらたに建営 こんえいありて舍利寺 しやりしと号 なづし、木庵 もくあんを中祖 ちうそとす。

80 浪花百景御勝山〔おかちやま〕 芳雪画

『撰津名所図会』 卷之三

岡山 おかやま〔岡村おかむらにあり。大小橋命おほおはせのみことの廟所べうしよなり。此命みことは天兒屋根命あまつこやねのみこと十三世せの裔孫ゑいそん、神功皇后しんくうかうくうの近臣きんしん、雷いかづちのおと大臣だいじんの子也こ。大織冠たいしやくわん

かまたりかう鎌足公せ十世とをつみやの遠祖えんそなり〕。

81 浪花百景茶白山雲水〔ちやうすやまうんすい〕 芳雪画

『浪花の賑ひ』 二編

茶白山

（前略）

又此南の向ふに邦福寺といふ禪刹あり、此方丈の座敷より眺望殊に美景なり。春秋の花紅葉はもとより、螢水鶏時鳥萩薄菊女郎花雪の景色一しほよくして遊観たへざる勝地也。且知音の徒乞ふに任せて普茶の料理を出せり。

『撰津名所図会』 卷之二

雲水坂

〔天王寺の南にあり。此地の念仏寺に、近世雲水比丘中興して、弥勒仏を安す。

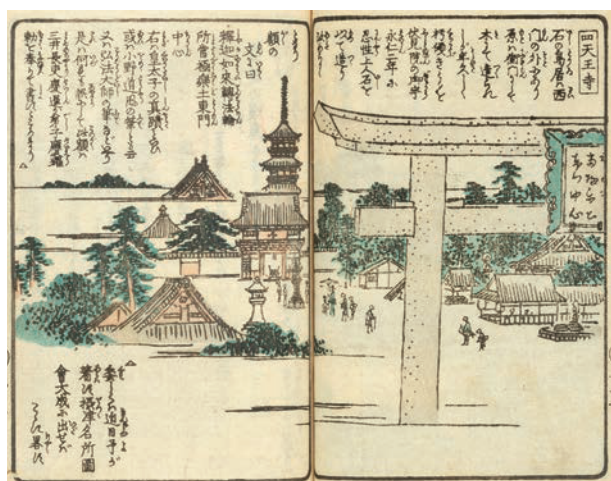
故に雲水の名あり。寺内に湯屋井といふあり。古温泉ありし跡也〕。

82 浪花百景

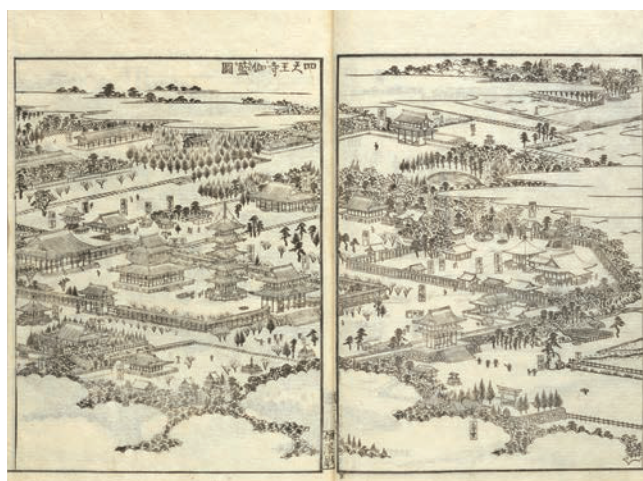
四天王寺伽藍

国員画

【してんのうじがらん】



『浪花の賑ひ』 2 編 四天王寺



『摂津名所図会』 卷之 2 四天王寺伽藍

『摂津名所図会』 卷之二

荒陵山四天王寺敬田院 「東生郡にあ

り。宗旨八宗兼学、今時天台宗江府東叡山

日光御門跡に属す。一名難波寺、又難波大

寺、又御津寺、法花園、又堀江寺、又荒

陵寺ともいふ」。(中略)

夫当山は上宮太子の御草創なり。由来は

太子伝にありて世の知る所なれば、委記

するに逮ず。(後略)

『浪花の賑ひ』 二編

荒陵山四天王寺 「一心寺門前の東に石の鳥居あり」。当山は聖徳皇太子の御草創なるこ

とは世の知る所なれば委く記するに逮ず、金堂、講堂、六時堂、五重大塔をはじめ諸堂

境内に薺々たり、年中法延間断なく四時ともに詣人繁し、就中二月涅槃精霊会を大会と称

す、又春秋両度の彼岸会、七月千日詣等は殊更に群参して雲霞のごとし。

四天王寺

石の鳥居は西門の外にあり、原は衝門にして木にて造られしが年久しく朽傾きけるを、

伏見院の御宇永仁二年に忍性上人石を以て造り改めらるゝ。となり額の文に曰、釋迦如來

転法輪 所当極樂土東門 中心右は皇太子の真蹟といひ、或は小野道風の筆とも云、又は

弘法大師の筆などいへり。是は何れも誤にして、此額は三井長吏慶進が弟子慶耀勅を

奉りて書すところなり。委しくは近日予が著す摂津名所図会大成に出せばこゝに畧す。

83 浪花百景

天下茶やぜさい【てんがちややぜさい】

芳瀧画



『撰津名所図会』 卷之 11 天下茶屋村是斎藤薬店

『撰津名所図会』 卷之一

名産和中散 めいさんわちゅうさん 「当村にあり。津田氏といふ。家伝云、今より六世の祖を宗本といふ。此時よりこゝに初て売弘む也とぞ。薬店は数十間を闊きて床椅数脚をならべ、往来の人を憩し、薬を湯に立て施す事四時間断なし。前栽に草亭あり。これを壺天閣といふ記あり」。(後略)

『浪花の賑ひ』 一二編

天下茶屋村 てんがちややむら 「住吉より半里ばかり北にあり」。伝云往昔豊太閤堺へ御往還の砌此地の茶店にて休ませ給ひしより斯は号くるとぞ、御休息の古跡は今尚南の端なる茶店の庭中にあるところといふ。

貞柳翁柳塚 ていりゅうをうやなぎづか 「同村の中央東側、安養寺にあり」。名産和中散 わちゅうさん 同西側にあり 通称是斎といふ、数十間の薬店を構へ数多の床椅をならべて往来の人を憩わし、薬を湯に立て施す事四時間断なし。又是より東北に聖天山 たて ほんどん 歡喜天の堂、僧坊あり。丸山等の丘あり眺望よし。

84 浪花百景 住吉岸姫松〔すみよしきしのひめまつ〕

芳瀧画

『撰津名所図会』 卷之一

すみのおはんかみのやしろう
住吉大神社（中略）いにしへより岸姫松と称ずる事は一樹に非ず。都て住江の岸の
浜松をいふなるべし。姫は讚美の詞也。或は大神秘蔵置給ふ義ともいふ。今住吉街道の
東の岸、岡山なる所にあるをむかしの岸の姫松の残りなりといふは、後人附会の説也。
惣して社頭の松をいふ。

『浪花の賑ひ』 二編

岸姫松 「新家の北街道の東の方に松原有」。
いにしへは此辺りまで浪打よせて岸なりしと
ぞ。此北に帝塚山といへるあり。風景いたつて
よし。名義詳ならず。



参考：『農具便利論』上巻 国会図書館蔵

85 浪花百景 住よし五大力〔すみよしごだいりき〕 芳瀧画

『撰津名所図会』 卷之一

神宮寺 「本社ほんしやの北きたにあり。旧号きうがうしんらじ新羅寺しんらじ。天台宗たいたいしゆ。東叡山とうゑいさんに属そくす。天平二年、孝謙かうけん天皇住吉大神すけよしおほのかみの靈告れいかうによつ

て建営けんゑいし給ふ」。(後略)

五大力菩薩像ごだいりきぼさつざう 「宝蔵ほうざうに安置す」。

86 浪花百景 浅沢の弁才天

〔あさざわのべんざいてん〕

芳瀧画

『撰津名所図会』 卷之一

弁財天祠 べんざいてんのやしろう

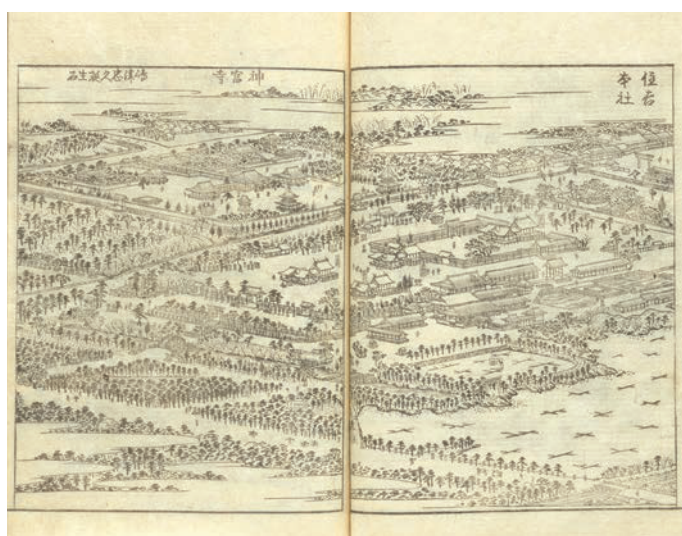
〔昔は浅沢沼 あさざわぬまの中にあり。中古神主館内。竹林の中に勧請す〕。

87 浪花百景 住吉反橋
〔すみよしそりばし〕
芳瀧画

88 浪花百景

住吉本社「すみよしほんしゃ」

国員画



『摂津名所図会』 卷之 1 住吉本社

『撰津名所図会』 卷之一

住吉大神社 「住吉郡にあり」。(中略)

夫此大神は千早振神代の御時、日向国小戸の橘の憶原より現れ

給ひて、当社の御鎮座は神功皇后紀十一年辛卯四月廿三日とか

や〔帝王編年集成〕。故に今に至て卯月上卯日の例祭あり。ま

づ、四の神殿の宮造は、皇后三韓御退治の時、当社は軍神なれば、

宮造の体諸社に混ぜず、其さまかはり、三社す、むは魚鱗の備へ、

一社ひらくは鶴翼の囲を顕し、所謂八陣の法、これを住吉造とい

ふ。四の鳥居四方に立瑞籬は四維に囲り、撰社・末社三十

余前巍然として連り、神人三百余家軒を双べて整々たり。詣人は

陰晴を嫌す間断なく、岸の姫松蒼々として君子の操を露し、神楽

の音・鈴の声・神馬の嘶穩にして、四海の波風静に国家を謚

じ社禊を輔け、春の日陰うら、かに和光円満の月高く照らし、

四所同塵の籬には随縁利物の花鎮に薫ず。(後略)

『浪花の賑ひ』 二編

住吉大神社 「安部野の南凡一里余にあり」。祭神一神殿底筒

男命、二神殿中筒男命、三神殿表筒男命、四神殿神功皇后以上四

社なり、撰社末社境内に充滿し名所旧蹟頗る多し事繁ければこゝに

略す。大神の靈騷あらたなるは言ふべくもあらず、大小の祭祀

一箇年に七十五度就中二月の祈年穀祭、五月の御田植、六月の

大祓、九月の宝市、十一月の新嘗祭等は普く婦女子も知る所にして

群参言語に絶せり、誕生石は名に高き反橋の東の詰にあり、又神

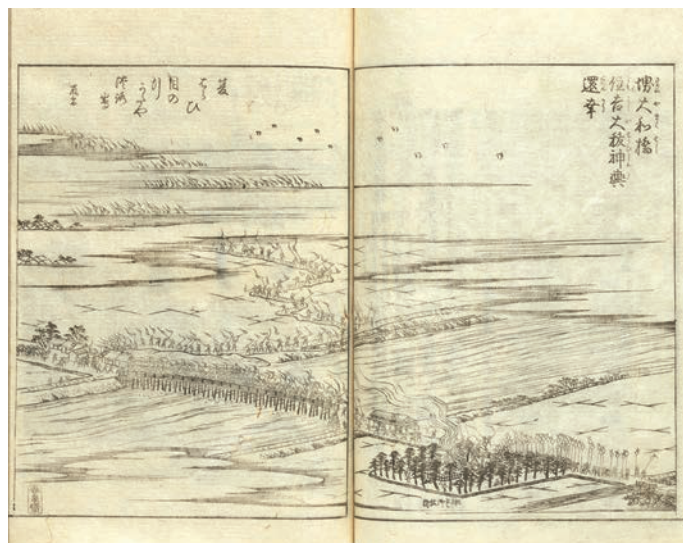
宮寺は一の社の北の方にして本尊は薬師如来宝蔵には五大力尊を安

す、大海神の社奥天神等は尚北にあり、最方境広大に神祠の数多

く且年中の行事繁く名所旧蹟等容易記がたし、委くは撰津名所図会

大成に編輯し近き出版に及べば閱して其密細なるを知るべし。

89 浪花百景 住よし大和橋〔すみよしやまとばし〕 芳瀧画



『摂津名所図会』 卷之5 堺大和橋 住吉大祓神輿) 還幸



参考：『住吉名勝図会』 卷之 5 大和橋神輿受取渡之台石 当館蔵

90 浪花百景

京橋【きょうばし】

芳雪画



『浪華の賑ひ』 初編 京橋



『摂津名所図会』 卷之4上 京橋爪川魚市

91 浪花百景 川崎ノ渡し月見景【かわさきのわたしつきみけい】 芳雪画

92 浪花百景 天満樋の口 【てんまひのくち】 芳雪画

93 浪花百景 毛馬【けま】 芳雪画

94 浪花百景 長柄三頭
【ながらみつがしら】 国員画

『撰津名所図会』 卷之三

長柄川渡口 ながらかはのわたし 〔北長柄にあり。横関済は南方村にあり。本庄 ほんしやう

渡しは本庄村にあり。十三のわたしは成小路村にあり〕。〔後略〕 しうせう なるこうし

95 浪花百景 柴島晒堤【くにじまさらしづつみ】 国員画

『撰津名所図会』 卷之三

柴嶋くにしま 〔今土俗、国嶋くにしまと書す。此辺淀川よとの流を汲くみて布木綿ぬのもめんを晒さらす。これを柴嶋晒くにしまさらしといふ。

むかし此所に茎渡口くきのわたしあり。今廃はいすなり〕。（後略）

96 浪花百景 江口君堂「えぐちのきみどう」 国員画

『撰津名所図会』 卷之三

君堂きみだう 〔江口里えぐちりにあり。日蓮宗宝林山寂光寺普賢院ふけんゐんと号す。女僧住職あまぢうしよくす。〕（中略）
 夫当寺ゆゑんの由縁きうき、旧記きこに聞きこへす。恐らくは江口の謡曲うたいの文義ぶんぎを種たねとして、後世こうせいいとなみし仏場也。彼文かのぶんに西行さいぎやうと和歌贈答わかそうたうの後、
 江口君えぐちのきみは普賢菩薩ふけんぼさつと現れ船ふねは白象はくざうとなりて西にしの空そらに入るの趣向しゆかうなり。これは、同撰集抄おなしくせんしうせうに書写山しよしやさんの證空上人しやうくうはんしうむろつ播州室津はんしうむろつの遊女ゆうしよ
 を見みて閉目へいもく観念くわんねんし給へは、忽たちまち遊女普賢菩薩ゆうしよふけんぼさつと見みへ、又眼めを開ひらけは本もとの遊女ゆうしよなり。これを江口の遊女ゆうしよに准なぞらへて謡うたいの文句もんくを作さく
 したり。又またそれを此寺たねに種たねとして普賢院君堂ふけんゐんきみだうと号かうす。（後略）



『撰津名所図会』 卷之三 江口里君堂

97 浪花百景 佐太村天満宮〔さたむらてんまんぐう〕 芳雪画

98 浪花百景 三嶋江〔みしまえ〕 国員画

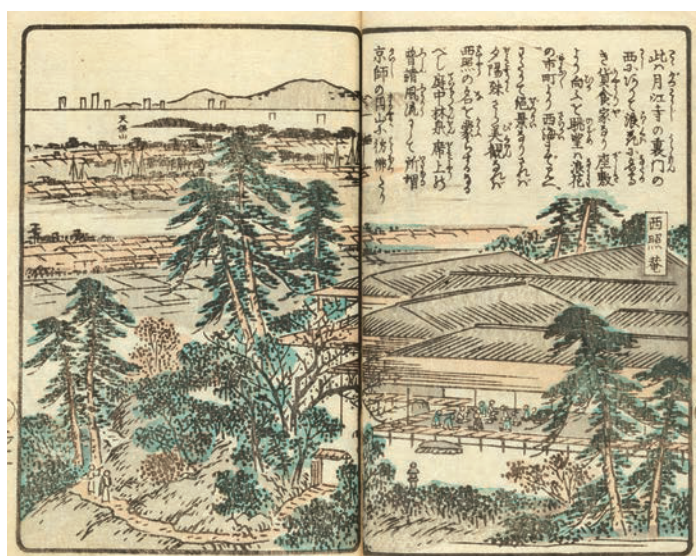
『撰津名所図会』 卷之五

三嶋江 〔五位荘の内也。古来和歌の名所にて代々の勅撰に多し〕。（後略）

99 浪花百景

西照庵月見景【さいしょうあんつきみけい】

芳雪画



『浪華の賑ひ』2編 西照庵

『浪華の賑ひ』二編

西照庵

此は月江寺の裏門の西にありて浪花に名高き貨食家なり。座敷より向ふを眺望は浪花の市町より西海まで見へわたりて
絶景なり。されば夕陽殊さら美観なれば西照の名を蒙らするなるべし。庭中林泉席上の普請風流にして所謂京師の田山に
彷彿たり。

100 浪花百景

野中観音桃華盛り

【のなかかんのんももはなさかり】

芳瀧画



『浪華の賑ひ』 初編 野中観音



『摂津名所図会』 卷之3 百濟野 上之宮
野中観音

『撰津名所図会』 卷之三

野中観音のなかのくわんおん 「東高津野中にあり。遍明院へんみやういんと号す。世に難波寺なにはしとい

ふは謬あやまりなり。此号かうは天王寺かきに限る事ことにや」。

本尊十一面観音 「僧正行基きやうきの作しやうにして、長六寸三分みだけ。脇士わきたち、不

動尊毘沙門天。此尊像わしうはせてら、和州長谷寺わしうはせてらの木尊もくそんと同木どうぼくにて、悪七兵衛

景清かげきよの守本尊しゆほんそんなり。日向みやの宮崎みやさきにありしか、故ゆゑありて江州三井寺

知増院ちぞういんに移うつすし、後世こうせい又またこゝに遷うつすなりと寺記しきに見みへたり」。

『浪花の賑ひ』 初編

野中観音のなかのくわんおん 「産湯うぶゆの清水しみずの西野中さいやちゆうにあり」。寺てらを遍明院へんみやういんといふ、本尊ほんそん

十一面観じういちめんくわん世音ぜおんは和州長谷寺わしうはせてらの霊像れいざうと同木どうぼくにして悪七兵衛あくしちびやう景清かげきよの守まもり

本尊ほんそんなるよし、俗ぞくに当寺たうじを難波寺なにはしといふ説せつ詳まつならず。

野中観音

玉造小橋たまつくりの辺ほとりより天王寺てんわうじまでの間あいだ凡すべて一円いちえんの桃畑ももばたけなれば、此野中このなかと

いへる地ちは全まつたく桃ももの最中さいなかにて、紅くれなひ匂におふ花はなの盛さかりには天てんも酔よる

光景くわうけいなり。されば物ものいわぬ花はなの下もとを人ひとは口くちを休やすむることなくおも

ひくうたに諷うたひつれつゝ、樽たるや瓢ひきや花はなの枝えだうちかたげたる楽たのしみは、彼かの

桃源とうげんの仙境せんきやうはいざしらず、其その一時いつときの榮花えいばにて千歳ちとせも延のぶる心地こゝちなるべ

し。